

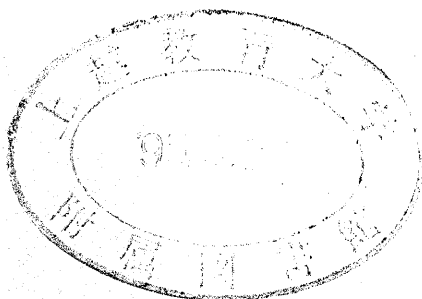
平成6・7年度 科学研究費補助金（一般B）

「聴覚障害児用言語力評価テストの標準化に関する研究」

はじめに

聴覚障害児教育において最も重要な課題は言語能力の育成であり、言語指導については内外の多くの研究者や教育者が熱心に取り組んできた。同時に、欧米諸国では言語能力の評価という面でも多くの研究がなされ、言語能力評価は言語指導と同等の重みをもって位置づけられている。特に米国では1975年の全障害児教育法の制定により障害児の能力評価の重要性が再認識され、多くの評価法が開発された。しかるに、現在我が国には、聴覚障害児を対象にした言語能力に関する評価法はほとんどなく、各教育機関で独自の評価を試みるか、健聴児を対象にした市販のテストで間に合わせているのが現状である。特に、聴覚障害児の話しことばの使用能力の評価法の開発は欧米諸国に比して我が国は非常に遅れている。その結果、多くの教育現場では聴覚障害児の言語能力を正当かつ客観的に評価することができず、指導プログラムの設定、指導効果の判定、教育措置などの面で支障をきたしており、聴覚障害児に適した言語能力評価法の科学的な研究および評価テストの開発が要望されている。

本研究では、聴覚障害児の言語指導や判別に有効であり、かつ、聴覚障害児に適した話しことばの使用能力評価法「ガエルテスト」の開発を研究目的としている。もともと、この研究は開始してから約9年になる。その間、様々な修正を経て「ガエルテスト」の一応の完成をみることができた。「ガエルテスト」の詳細な説明、実施方法および聾学校小学部児童を対象に実施したテスト結果は平成4・5年度の科学研究費補助金（一般B）の研究成果報告書にまとめた。そして平成6・7年度ではこのテストの標準化をめざしてさらにデータを収集したのでその結果をこの研究成果報告書にまとめる次第である。



# 第 1 章 目的と方法

## 1. 研究の目的

聴覚障害児の話しことばの使用能力を評価するために開発された「ガエルテスト」を使用して、これまで聾学校幼児・児童を対象にデータを収集してきたが、今回は難聴学級在籍児童および若干の健聴児を対象にテストを実施し、本テストの標準化を進めることを目的としている。

## 2. 方法

### (1) 調査方法

ガエルテスト・レベル 2（絵カード使用の部分）を難聴学級在籍児童および健聴児に実施するとともに、難聴学級担当教師にアンケート調査を行い、話しことばの使用能力に関係する要因についても検討する。

### (2) 対象児

長野県および神奈川県の子難聴学級または言語障害学級で指導を受けている小学校 1～6 年生の聴覚障害児 40 名（男子 26、女子 14）。平均聴力レベルは 43～112 dB の範囲であり、平均で 75.1 dB (SD 20.9) であった。健聴児は新潟県内にある幼稚園幼児 4～6 歳児 34 名（男子 19、女子 15）。内訳を以下に示す。

	4 歳児	5 歳児	6 歳児	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年
聴覚障害児	—	—	—	4	7	6	9	6	8
健聴児	1 1	1 3	1 0	—	—	—	—	—	—

### (3) 分析方法

このテストでは 40 の目標文が設定されている。目標文が正確に表出できた割合を正反応率とする。各目標文はさらに細かく文法的な要素に分けて分析される。テストには全部で 251 の要素が含まれている。正しく表出できた要素の割合を通過率とする。

## 第 2 章 結果と考察

### 1 難聴学級児童の正反応率及び通過率

#### (1) 全体の正反応率及び通過率

全体の平均正反応率及び通過率は、それぞれ 70.6%、91.3%となり、通過率は、100%に近い。従って難聴学級児童は、文法的要素（語彙）の量はほぼ確保されていることが確認された。

#### (2) 学年毎の正反応率及び通過率

次に、学年毎の正反応率及び通過率を図 1 に示す。学年と正反応率との相関係数は  $r=0.33$  となり、弱い相関が見られた。図 1 から 1～4 年生までの間では学年の上昇につれ正反応率も上昇することが分かる。この結果は、新宮(1995<sup>24)</sup>)の研究と一致するものであった。そこで、1～4 年生までの間で相関係数を見てみると、 $r=0.60$  となり中程度の相関が見られ、1～4 年生まではほぼ学年に比例して正反応率が上がっていくことが分かった。しかし、5・6 年生では正反応率に伸び悩みがみられる。そこで学年毎の正反応率の散布状況を調べてみた(図 2)。これによると各学年におけるバラつきの幅はほぼ変わりがないので、これは個人差によるバラつきの問題ではないといえる。

次に、各学年における通過率を分析する(図 1)。通過率は 2 年生を境にほぼ 90%を越え、横這いの状態になる。従って、難聴学級児童は 2 年生までに各文法的要素は身につけていることが分かる。5・6 年生も通過率は必ずしも低くない結果を示しており、その理由としては、各品詞は合っているのだが、間違える品詞がそれぞれの目標文に分散しており、1つの目標文の中に集中していないためだと考えられる。5・6 年生の誤答を詳細に検討してみると、文法的には合っているのだが、目標文と違う言い回しをしてしまい、誤答となるケースが多く見られた。高学年になると自分なりの言い回しで表出する傾向が見られるということを示すと考えられる。

#### (3) 月齢（年齢）毎の正反応率

月齢による正反応率の散布を図 3 に示す。正反応率と月齢の間は、相関係数  $r=0.30$  でほとんど相関は見られず、むしろ個人差が大きいことが分かった。

#### (4) 成績群毎の正反応率

さらに成績の違いによる傾向を分析するために、成績群によって児童をグルーピングする。

- ・成績上位群（以下H群と称す）・・・正反応率が 75%よりも上の児童
- ・成績中位群（以下M群と称す）・・・正反応率が 50%より上～75%

までの児童

- ・成績下位群（以下L群と称す）・・・正反応率が 50%以下の児童

内訳は、表 2 参照のこと。

成績群毎の通過率を図 4 に示す。この図から、H群とM・L群を大きく分けるのは通過率

の差であることが分かる。通過率の差は文法的要素の問題であるので語彙の量、及びその選択に問題があると思われる。

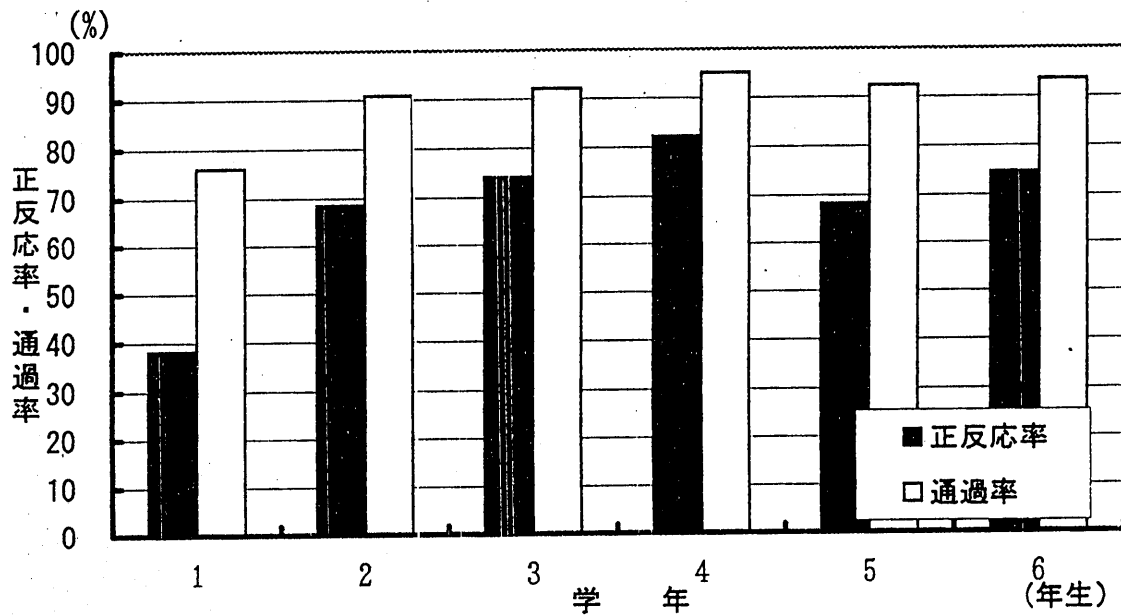


図1. 難聴学級児童の学年毎の正反応率と通過率

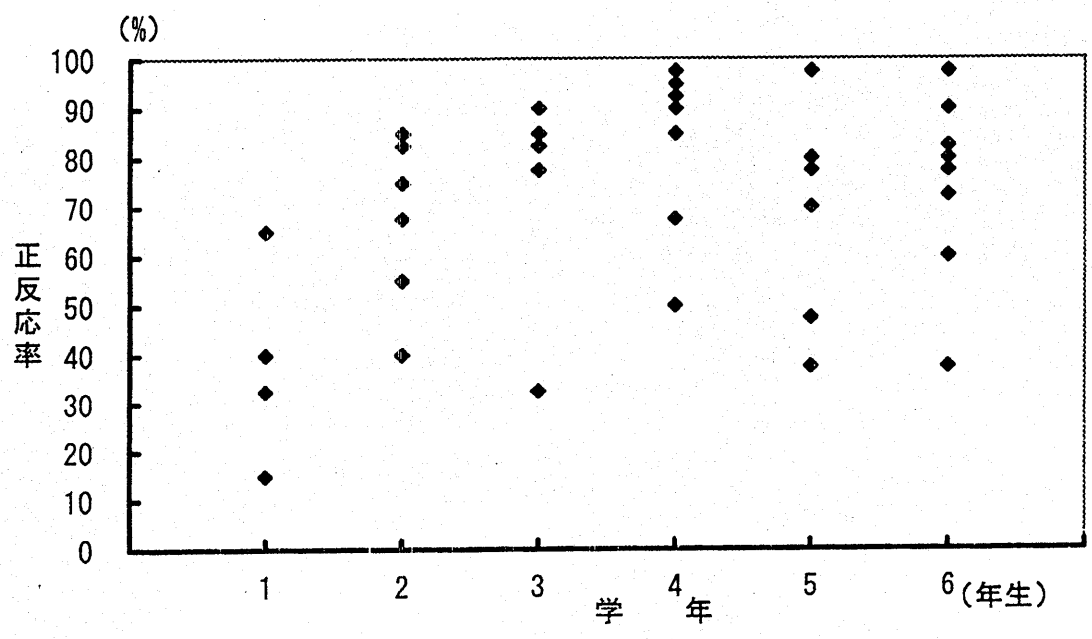


図 2. 難聴学級児童の学年毎の正反応率散布図

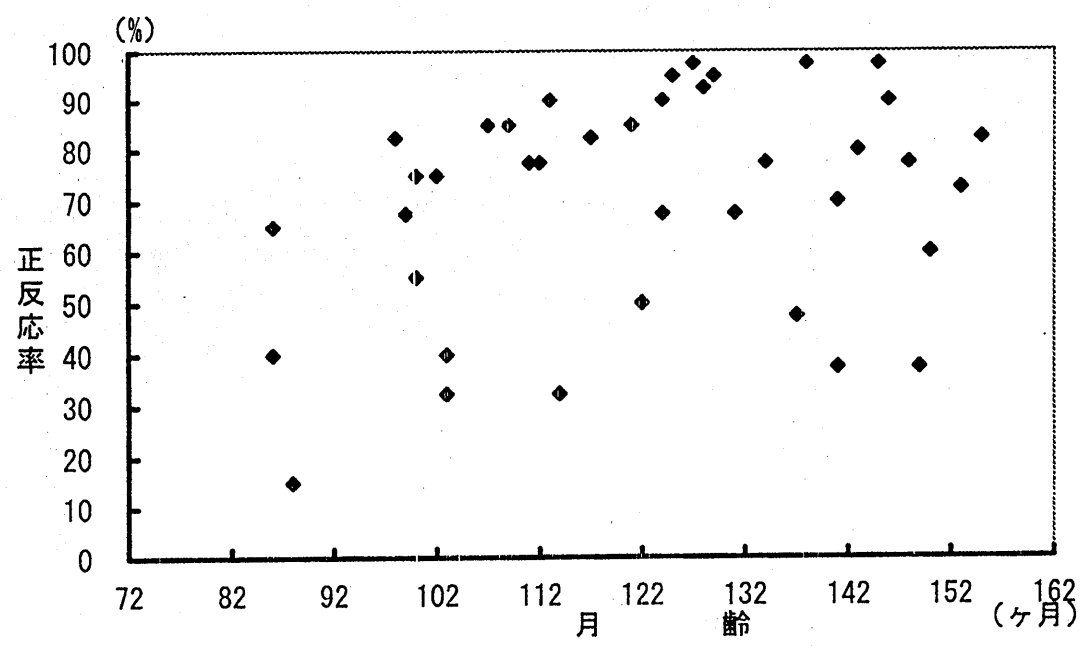


図 3. 難聴学級児童の月齢による正反応率散布図

表 2. 成績群内訳

	合計人数
成績上位群 (H群)	21
成績中位群 (L群)	10
成績下位群 (M群)	9

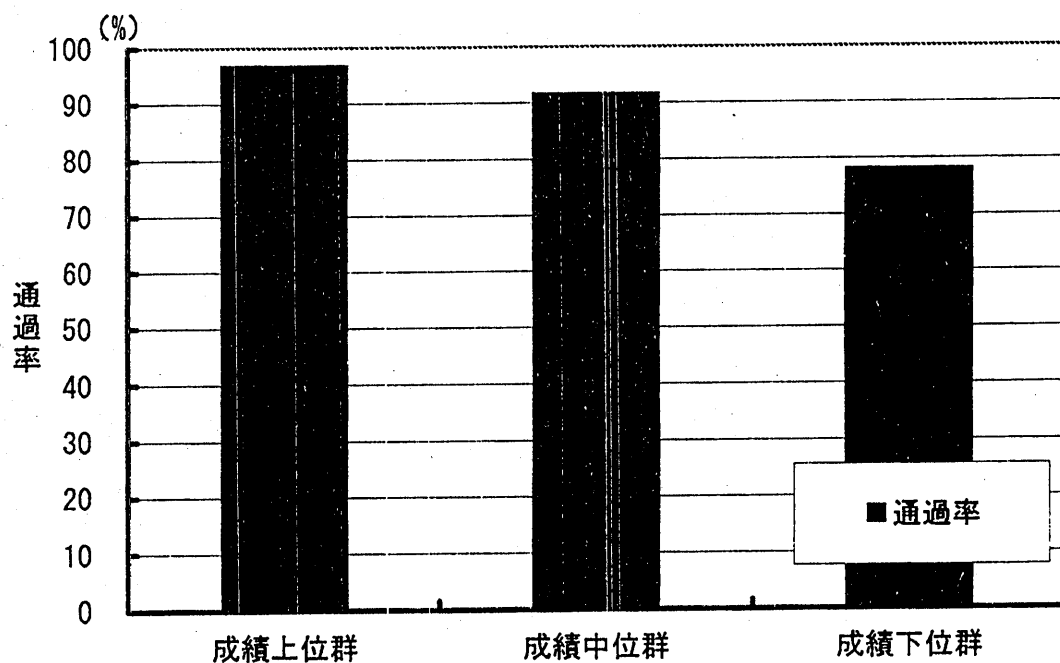


図 4. 難聴学級児童の成績群毎の正反応率と通過率

## 2 難聴学級児童の各活動の正答者率

### (1) 全体の活動及び目標文毎の正答者率

難聴児の各活動の正答者率を図5に示す。正答者率が70%以上の活動は1・2・3・5の4活動であった。正答者率が60%よりも低いものは活動8・11・12の3つであった。これらの活動の中身を見てみると、活動8は複文を扱っており、難聴学級児童は複文を苦手とすることが分かる。活動11・12に関しては絵カードの絵の解釈の仕方が、個人個人によってかなり異なっており、そのため目標としている文が出にくかったため正答者率が低かったのではないかと考えられる。

### (2) 学年毎の各活動における正答者率

学年別の各活動における正答者率を図6に示す。その結果、特に1年生の正答者率の低さが目立つが、それに比べて2年生の正答者率が急上昇している。難聴学級児童の各活動毎の発達的特徴として、1～2年生にかけて急激な発達を遂げると言え、文のレパートリーが広がると示されている。

### (3) 成績群別の各活動の平均正答者率

成績による誤りの傾向を文型から見るために、成績群毎に各活動の正答者率を見た(図7参照)。その結果、H・M群(その差は20%以内とする)とL群を大きく分ける(HまたはM群のどちらかの活動のうち、正答者率の低い方との差が30%以上あるものとする)活動は2・3・4・5の活動で、H群とM・L群(その差20%以内)を分けるのは活動10・11・12であった。なお、3群をそれぞれ分ける活動は、活動7・8・9であった。

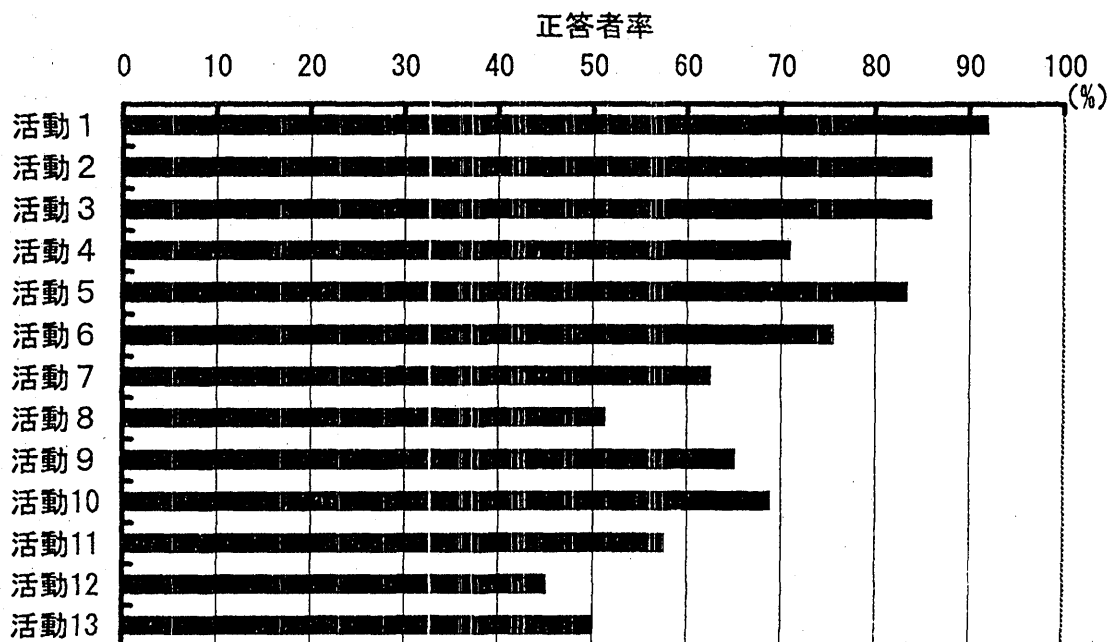


図5. 難聴学級児童の各活動の正答者率

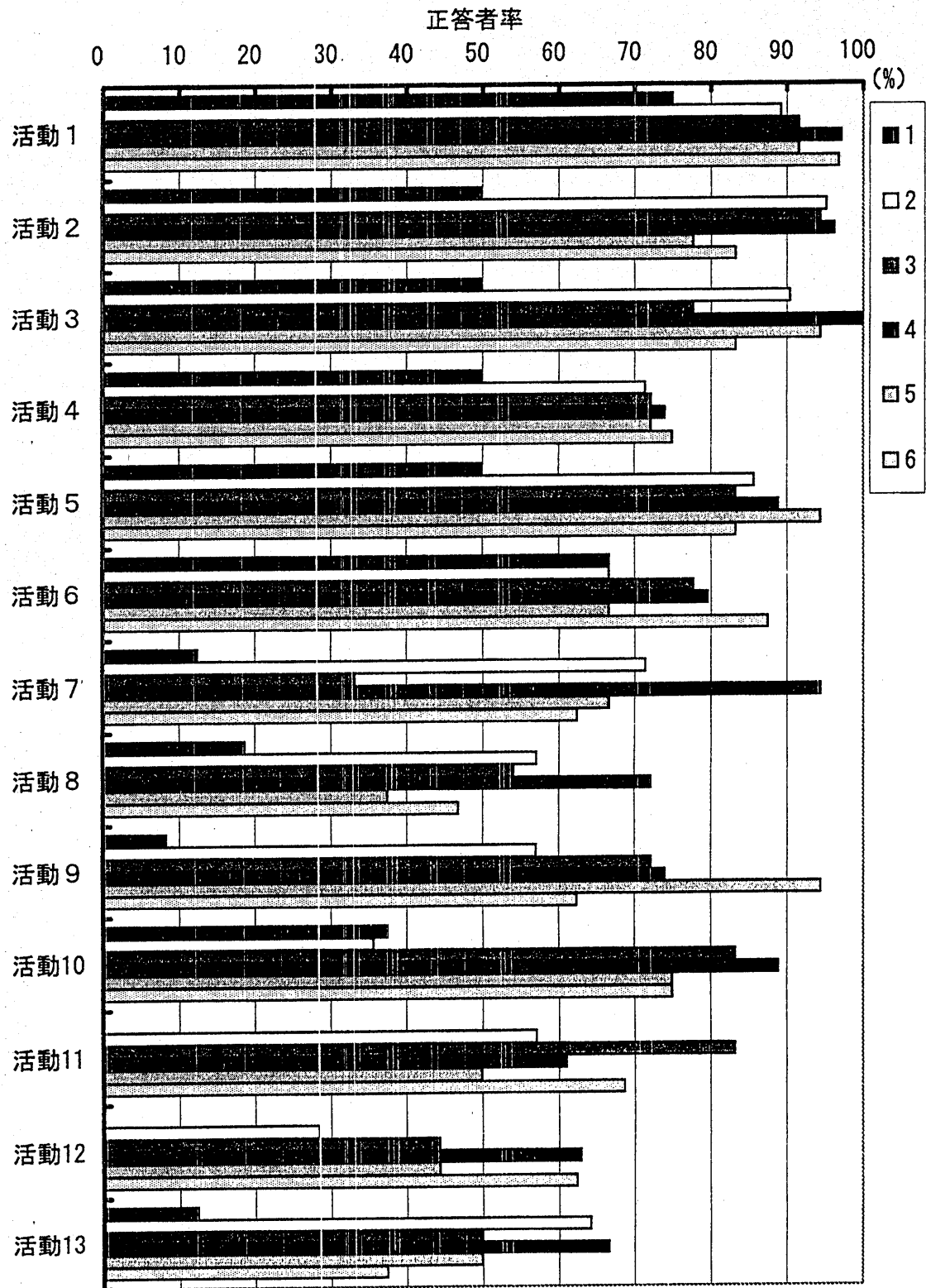


図6. 難聴学級児童の学年毎の各活動における正答者率



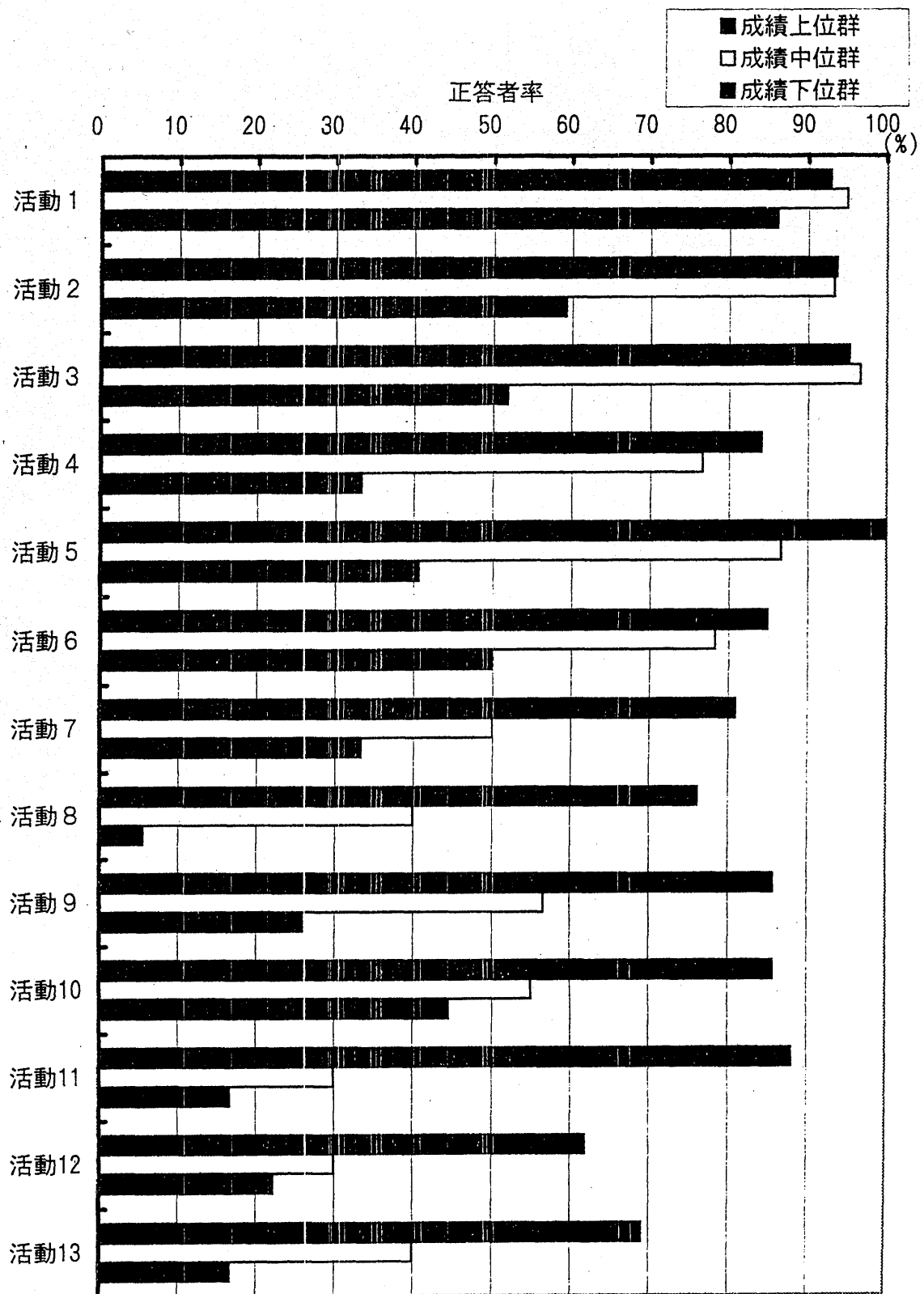


図7. 難聴学級児童の成績群毎各活動の正答者率

### 3 難聴児の文法的要素別の正反応率

#### (1) 全体の正反応率

全体の文法的要素別正反応率を図8に示す。文法的要素の正反応率はすべて80%を越えていた。名詞関係では、助詞の正反応率が最も低かった。動詞関係は全体的に名詞関係よりも正反応率が低く、特に質問、連体、条件などに苦手な傾向が見られた。ここから、複文や重文など長い文を作るための要素に、難聴学級児童には問題が生じることが予想される。

#### (2) 学年別の正反応率

学年別の正反応率を図9に示す。ここから、文法的要素別の聴覚障害児の発達的特徴を探ろうとしたが、顕著な傾向は見られなかった。各活動で見た正反応率と同じように1～2年生の差異が著しい。聴覚障害児は1～2年生へかけて適切な文法的要素を身につけ、使いこなせる力をつけていくと考えられる。

#### (3) 成績群毎の正反応率

成績群毎の文法的要素別正反応率を図10に示す。H群に関しては、どの品詞も90%を越えていた。M群は名詞関係は90%を越えていたが、動詞関係の断定、条件、連体、質問で90%を割ることから、動詞関係につまずきを生じていることが分かる。難聴児は健聴児との会話の中で質問する機会も多いと思われる。しかし質問の正反応率が低いことから、通常学級でのコミュニケーションが心配される。L群においては名詞関係の方が成績がよいが、その中でも助詞の正反応率が低かった。動詞関係においては80%を越えるものがなく、連体、条件といった重文や複文を作るための要素が身に付いていないことが分かる。

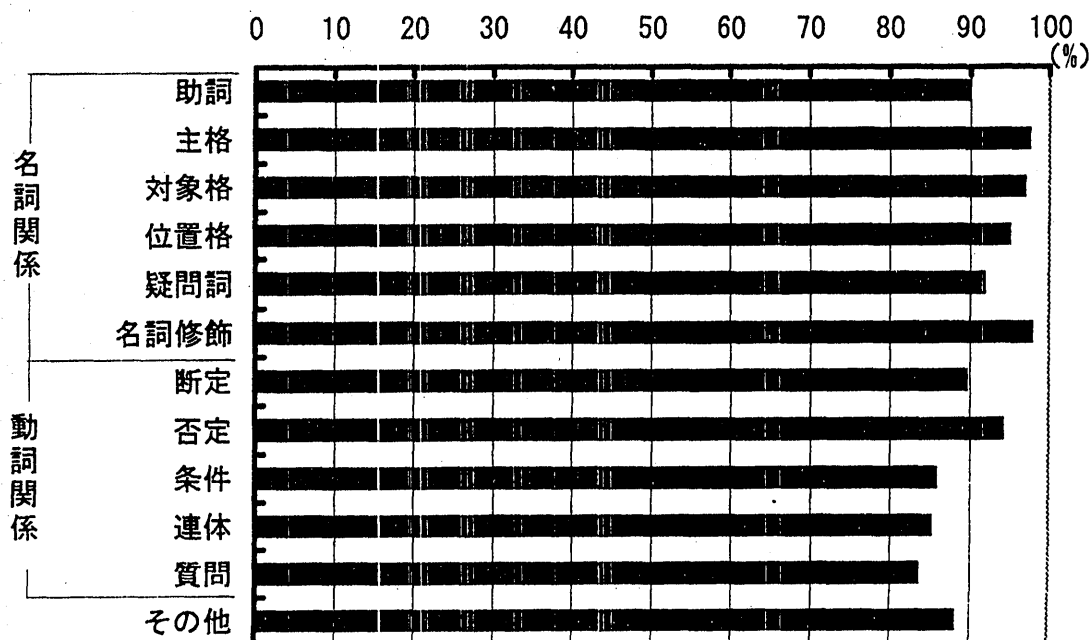


図8. 難聴学級児童の文法的要素別の正反応率

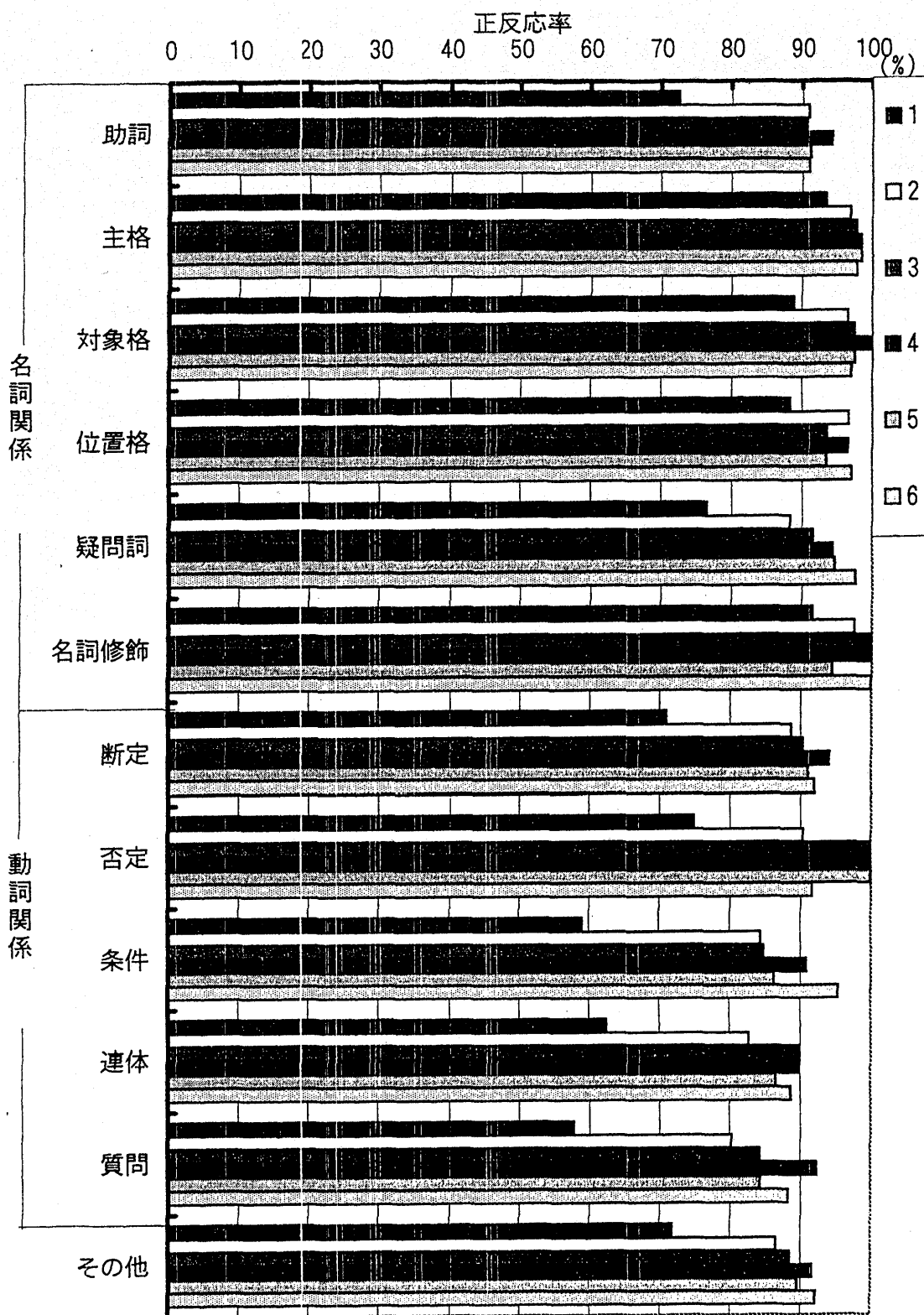


図9. 難聴学級児童の学年毎文法的要素別正反応率

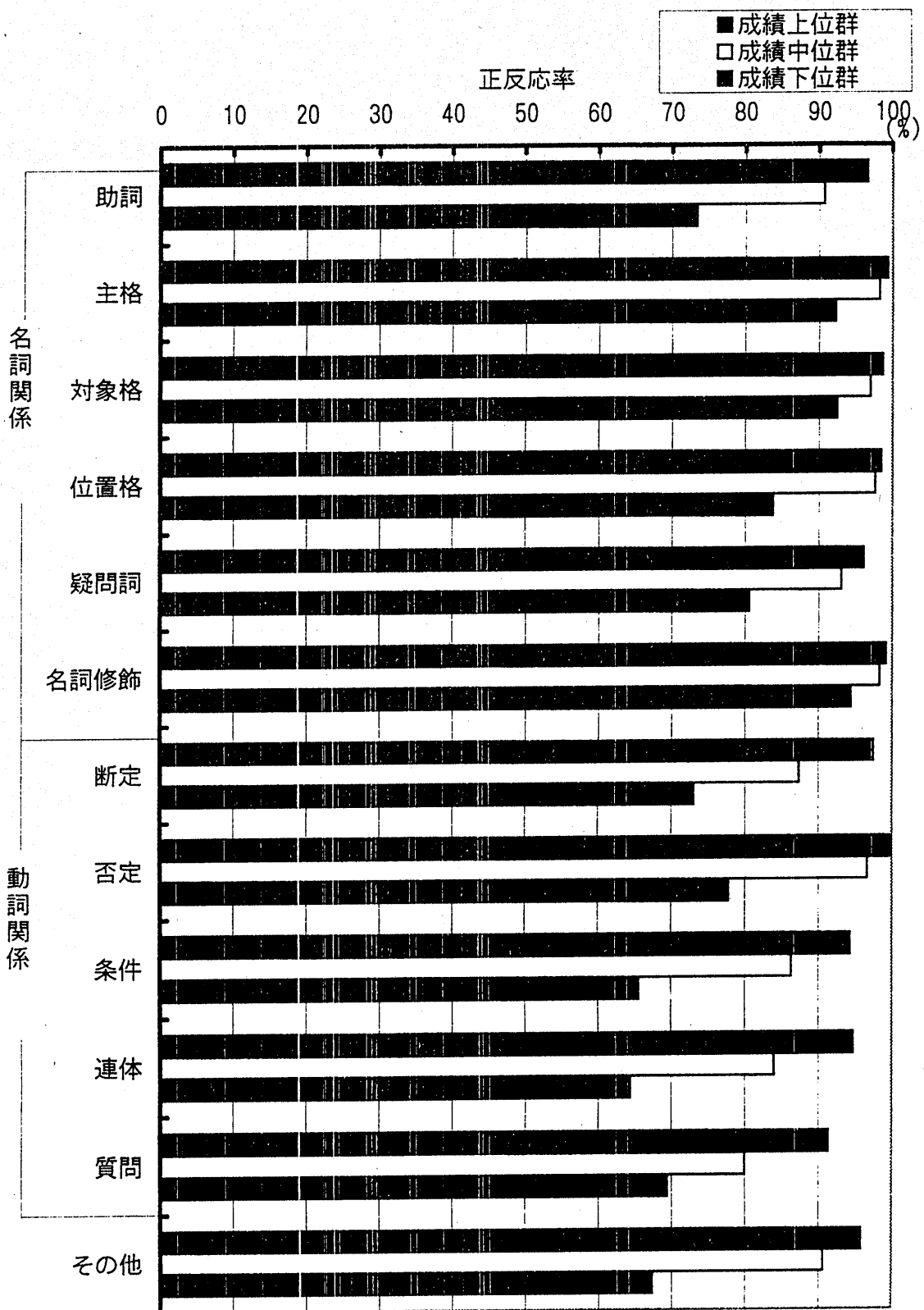


図10. 難聴学級児童の成績群毎の文法的要素別の正反応率

#### 4 健聴幼児の正反応率及び通過率

##### (1) 全体の正反応率及び通過率

全体の平均正反応率は51.0%、通過率は78.4%であった。

##### (2) 毎学年の正反応率及び通過率

毎学年の正反応率及び通過率を図11に示す。ここから、健聴幼児は正反応率・通過率ともに学年が上がるにつれて同じような比率で伸びていることが分かる。学年と正反応率の相関係数は $r=0.46$ で中程度の相関が見られた。ここから、学年が上がるに従って正反応率も伸びていくことが分かる。次に毎学年の正反応率散布を図12に示す。ここから、各被験児の人数は違うが、学年が上がっていくに従い、個人差が拡大していくことが分かる。

##### (3) 月齢（年齢）毎の正反応率

月齢と正反応率の相関を見ると、相関係数 $r=0.53$ となり中程度の相関が見られた。月齢と通過率の相関は $r=0.42$ で同じく中程度の相関が見られた。健聴幼児は月齢（年齢）が上がるに従い、正反応率も上がることが分かる。

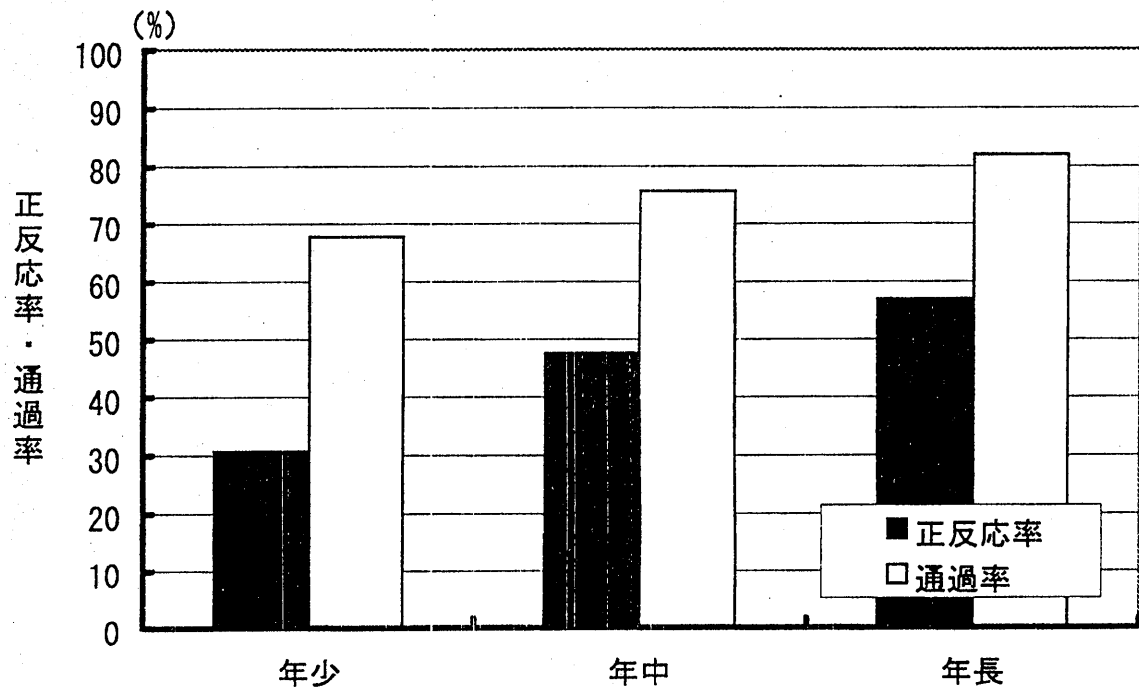


図11. 健聴幼児の学年毎の正反応率と通過率

## 5 健聴幼児の各活動の正答者率

### (1) 全体の各活動毎の正答者率

全体における各活動の正答者率を図 13 に示す。ここから、健聴幼児の場合、正答者率が 70% を越えるものが、1 活動しかないことが分かる。特に、正反応率が 40% 以下の活動として活動 4・8・12・13 があげられる。

### (2) 学年毎の各活動の正答者率

学年毎の各活動の正答者率を図 14 に示す。ここから、活動 1 や活動 13 のように、各活動とも必ずしも年少から年中へと正答者率が上がるのではないという結果が得られた。おそらく個人差があるためと思われる。

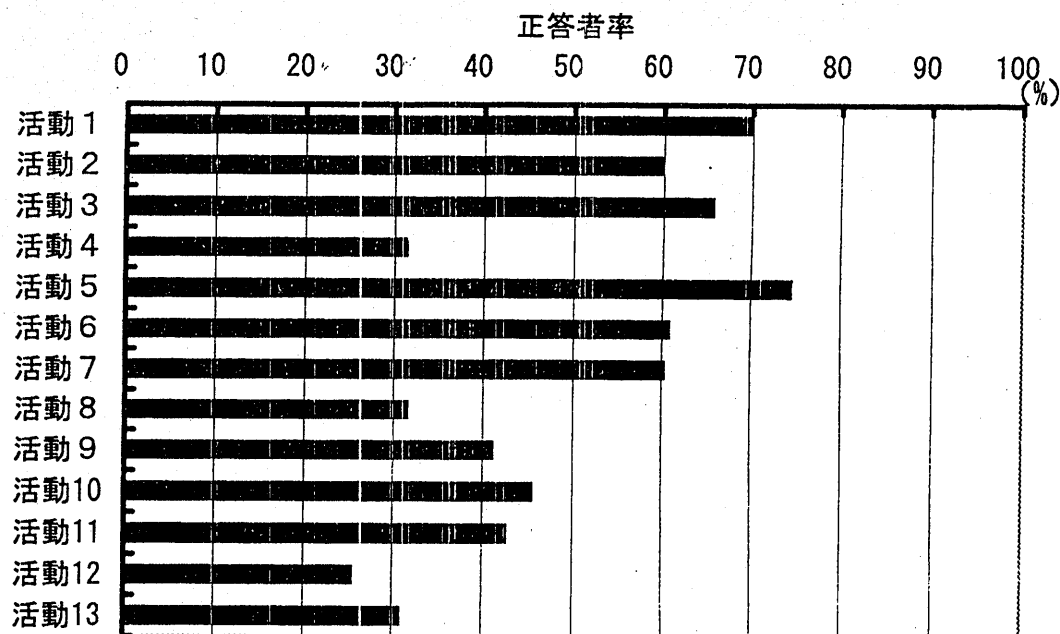


図13. 健聴幼児の各活動の正答者率

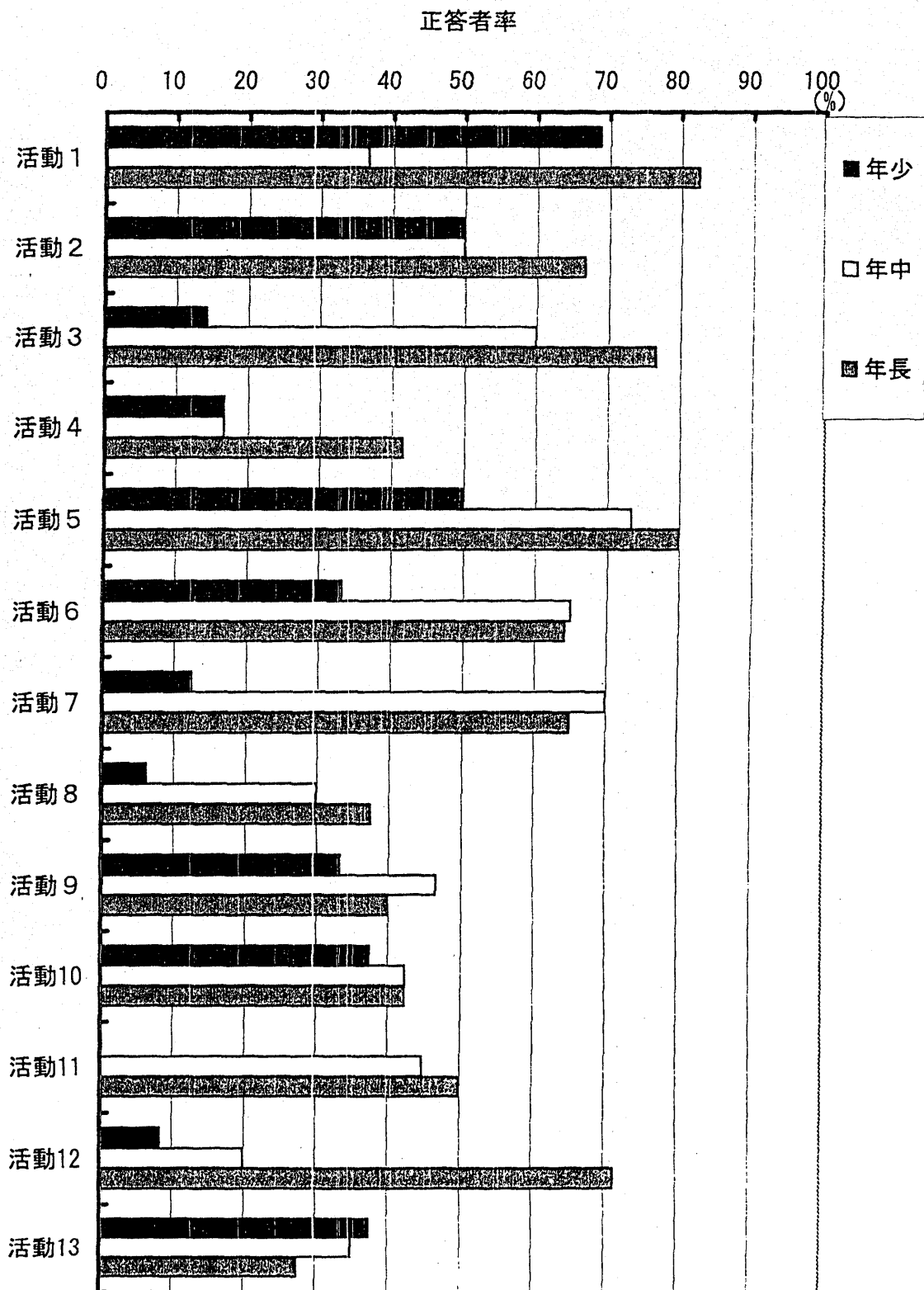


図14. 健聴幼児の学年毎各活動正答者率

## 6 健聴幼児の文法的要素別の正反応率

### (1) 全体の平均正反応率

文法的要素別の正反応率を図15に示す。健聴幼児においても、名詞関係の方が動詞関係よりも若干ではあるが正反応率が高い傾向が見られた。しかし、一番正反応率が高かったのは、動詞関係の中の否定形であった。

### (2) 学年別の正反応率

学年別の正反応率を図16に示す。全ての要素について年少の成績が年長を上回ることにはなかった。しかし、年少と年中で成績が逆転するもの（主格、対象格）や、年中と年長で逆転するもの（名詞修飾、条件）も見られた。文法的要素は学年の上昇によって均等に獲得されていくのではなく、その獲得に個人差があることが予想される。

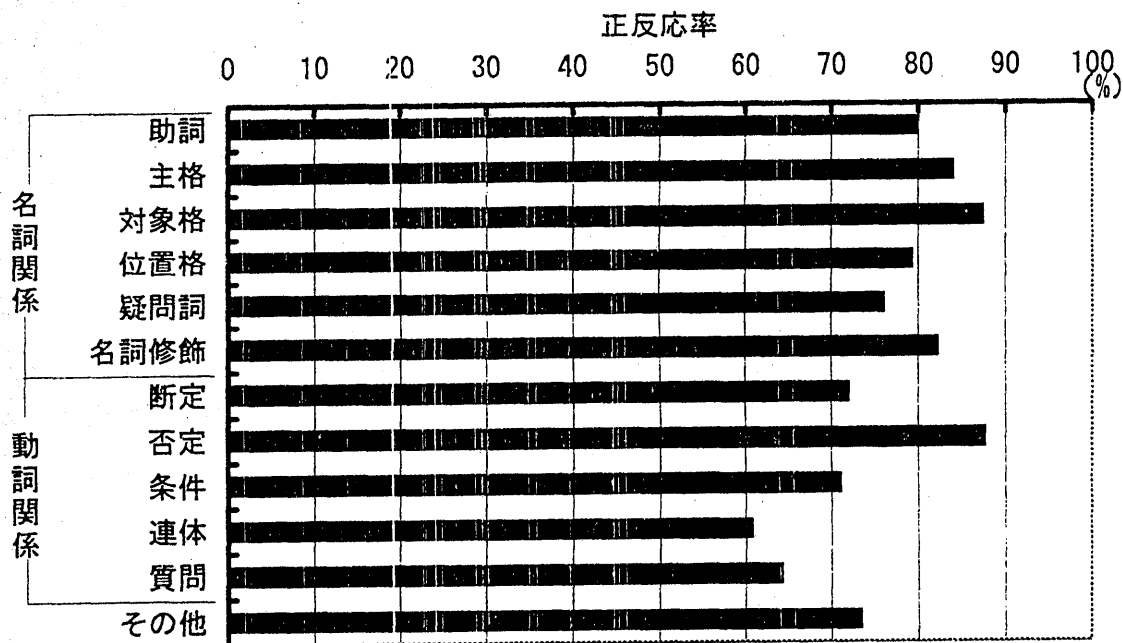


図15. 健聴幼児の文法的要素別の正反応率



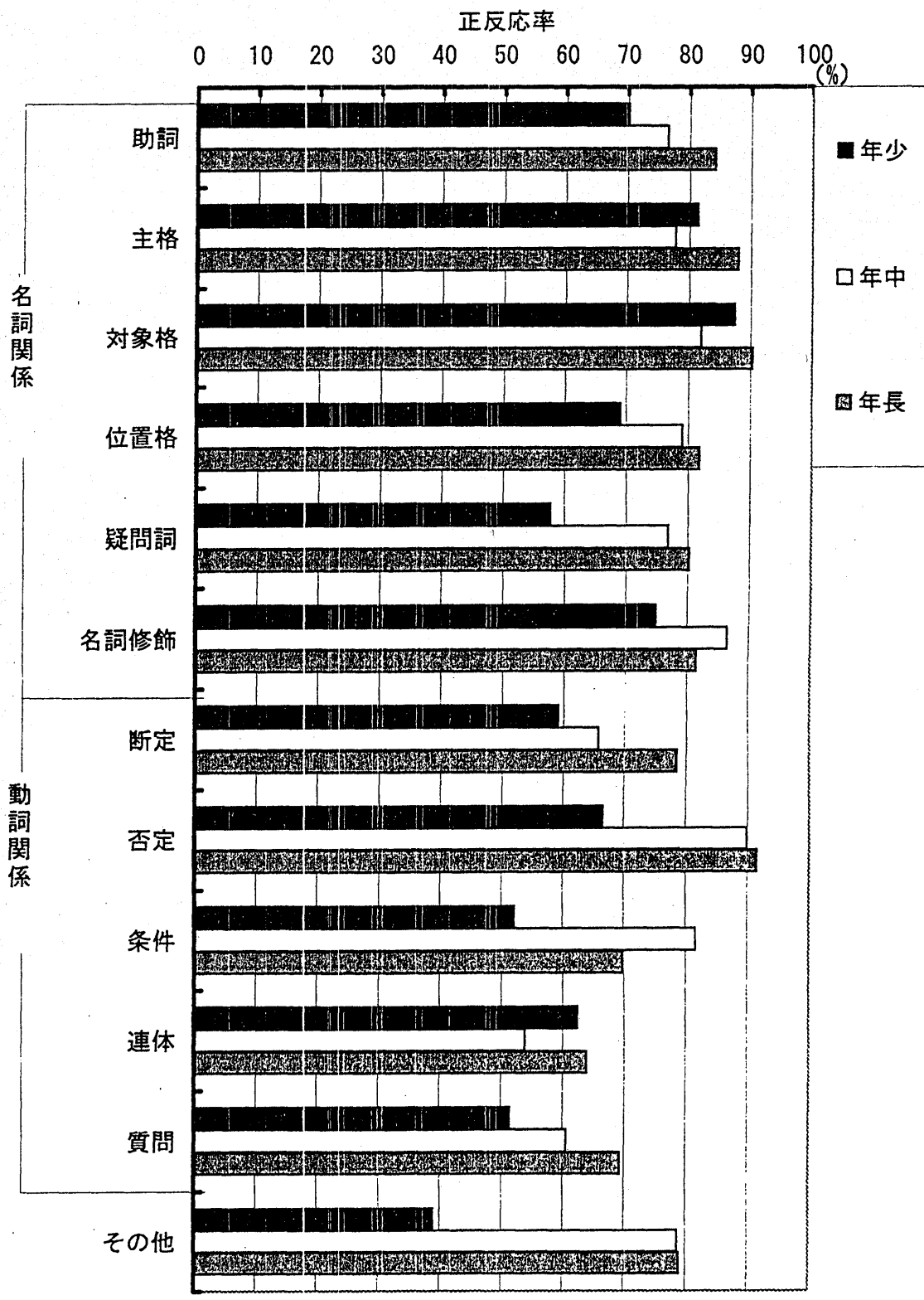


図16. 健聴幼児の学年毎の文法的要素別の正反応率

## 7 健聴幼児と難聴学級児童の比較

### (1) 正反応率及び通過率

正反応率と通過率の比較を図 17 に示す。正反応率・通過率どちらも難聴学級児童の方が健聴幼児よりも成績はよかった。

次に、学年毎の正反応率を図 18 に示す。難聴学級児童の 1 年生のレベルは、健聴幼児年中・年長よりも低い。しかし、2 年生になると健聴幼児の年長以上の正反応率を上回っている。

健聴幼児の学年毎と難聴学級児童の成績群別に示したものが図 19 である。成績 L 群は年中のレベルよりも低い。

### (2) 各活動の正答者率

各活動の正答者率を図 20 に示す。活動 4 以外は健聴幼児と難聴学級児童は正反応率の差が同じような割合である。

さらに、これを健聴幼児と難聴児の成績群で比較する(図 21)。H 群は、すべての活動で健聴幼児よりも正答者率は上であった。活動 7・11 では M・L 群は、健聴幼児よりも正答者率が下回っていた。活動 7 は「どんなときに」という疑問詞がついており、難聴学級児童にとって、日常あまり使い慣れない構文であったため、正答者率が低かったと考えられる。活動 11 は、条件形や推定結び形という複雑かつ長い構文を扱っており、これも難聴学級児童にとっては普段あまり聞き慣れない構文であったため正答者率が低かったと考えられる。

### (3) 文法的要素別の正反応率

健聴幼児と難聴学級児童の文法的要素別の正反応率を図 22 に示す。難聴学級児童の方が、健聴幼児よりもすべての品詞において正反応率が上回っていた。

次に、成績群毎の正反応率と比較したのが図 23 である。H・M 群においては、健聴幼児よりも正反応率が下回るものはなかったが、L 群においては、助詞、否定、条件、その他、で健聴幼児よりも下回る結果となった。この要素は健聴幼児の正反応率の低かった要素(連体、質問)と異なっており、文法的要素の獲得に関しては、L 群には健聴幼児とは異なる遅れが予想される。

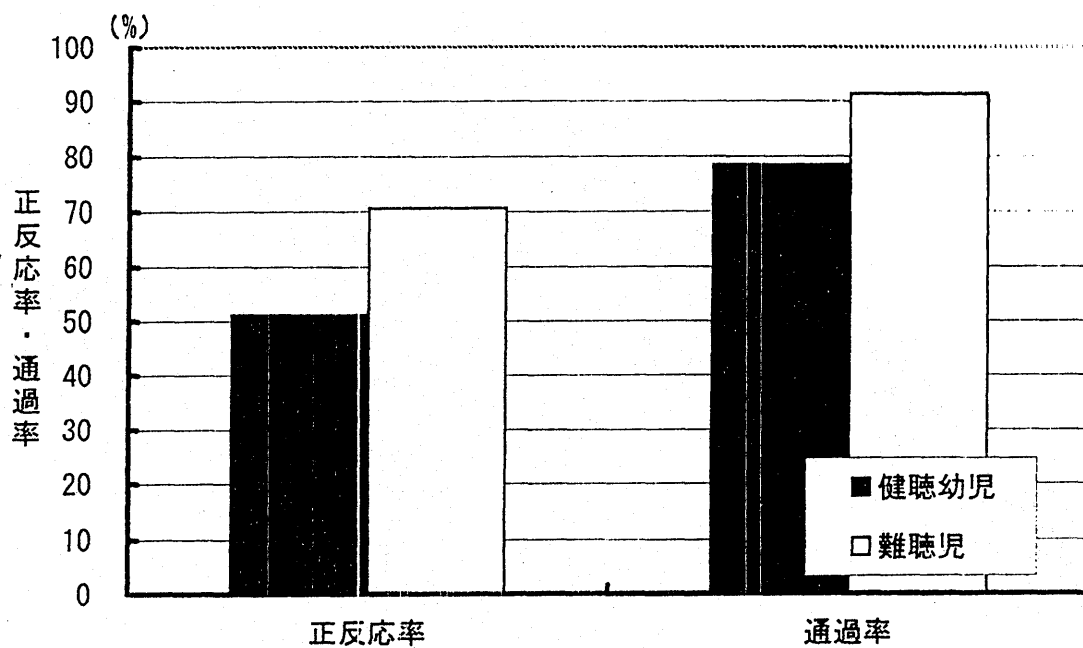


図17. 健聴幼児と難聴学級児童の正反応率と通過率

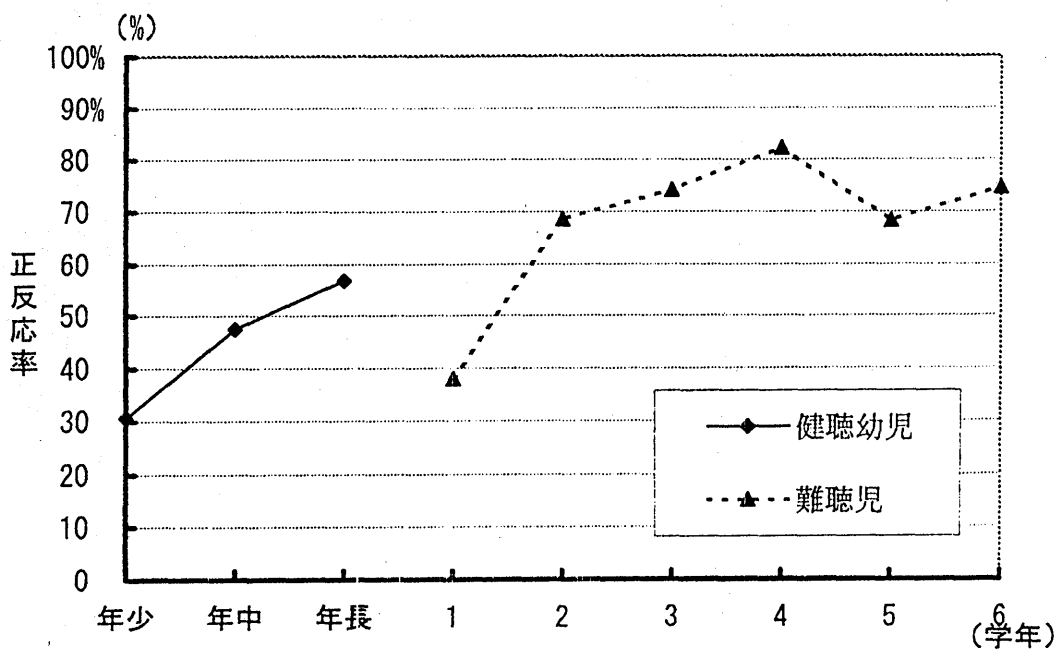


図18. 健聴幼児と難聴学級児童の学年毎正反応率

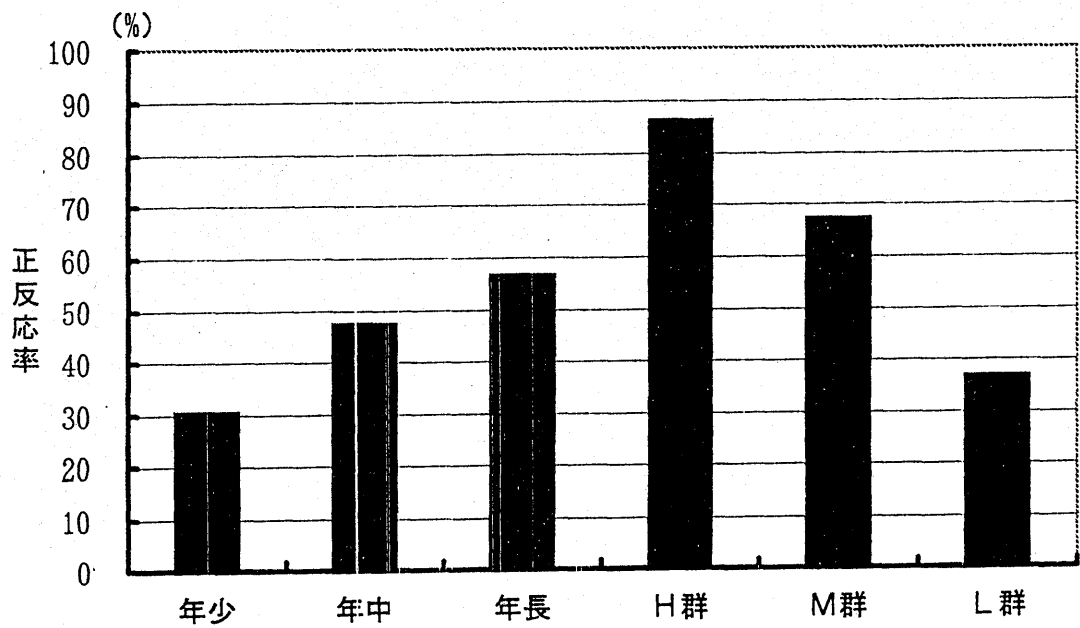


図19. 健聴幼児学年毎と難聴学級児童成績毎の正反応率

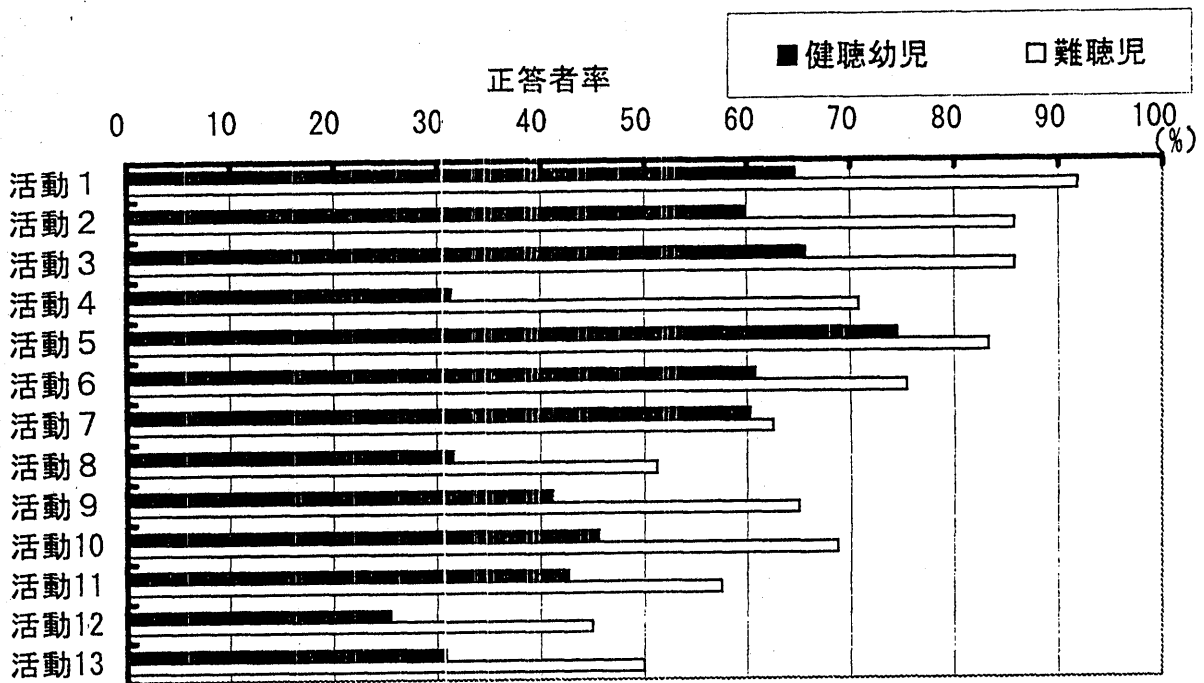


図20. 健聴幼児と難聴学級児童の各活動における正答者率

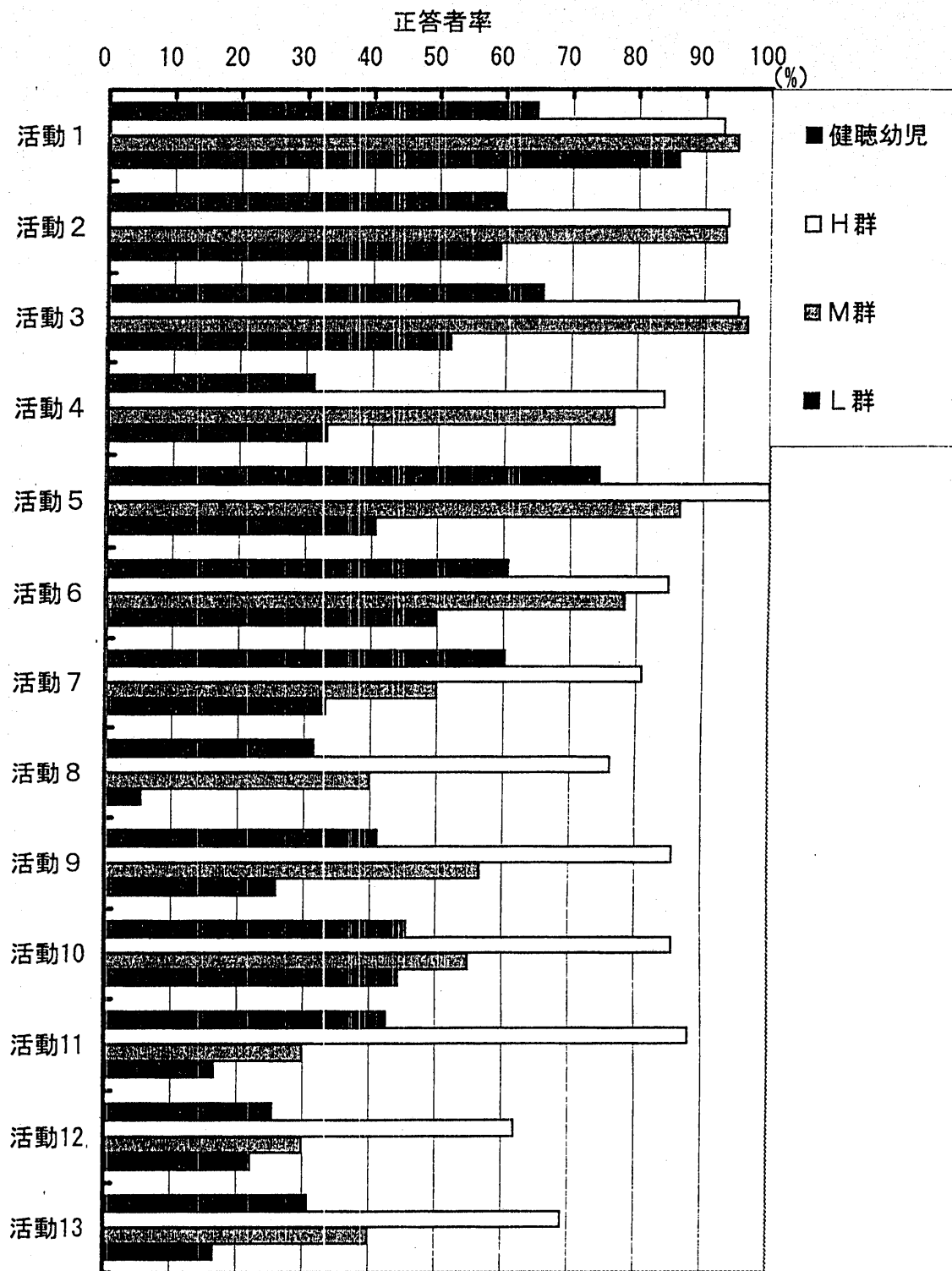


図21. 健聴幼児と難聴学級児童成績群毎の各活動正答者率

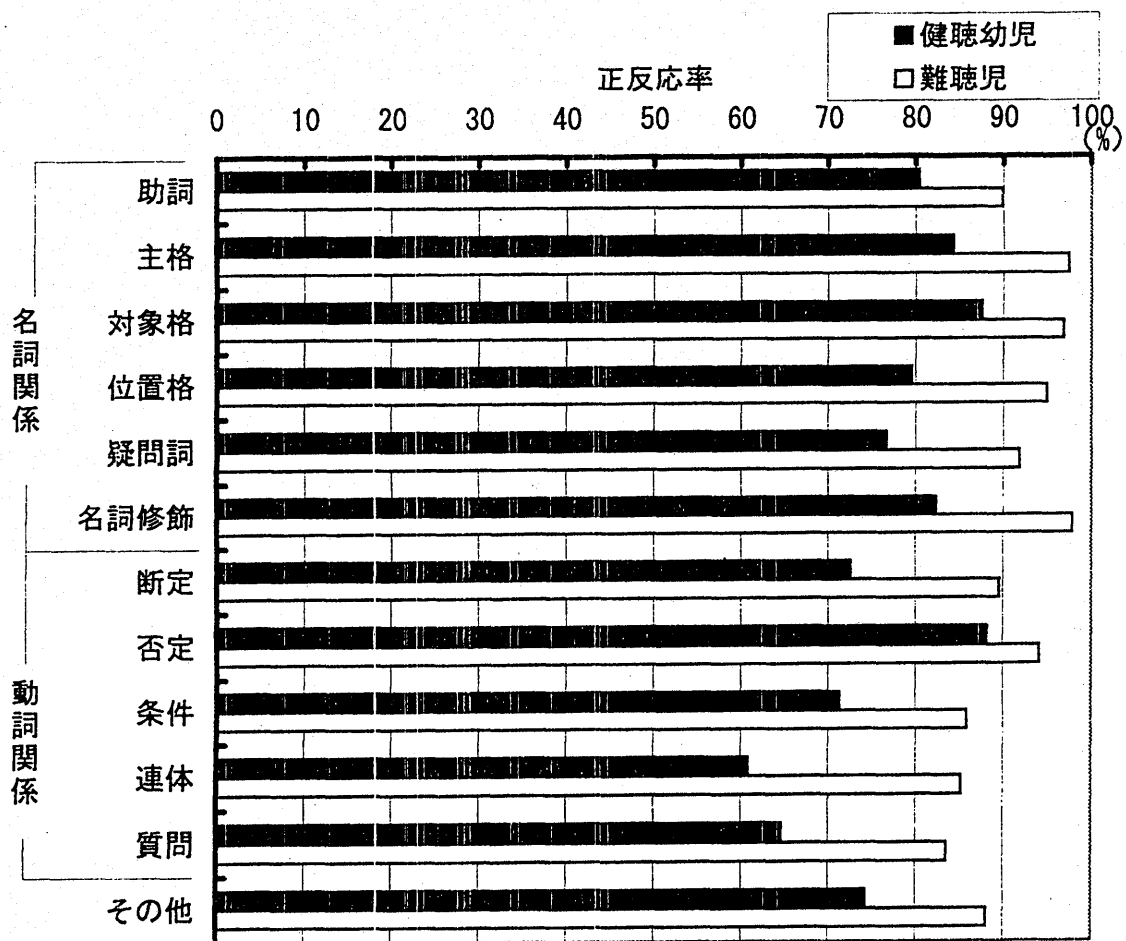


図22. 健聴幼児と難聴学級児童の文法的要素別正反応率

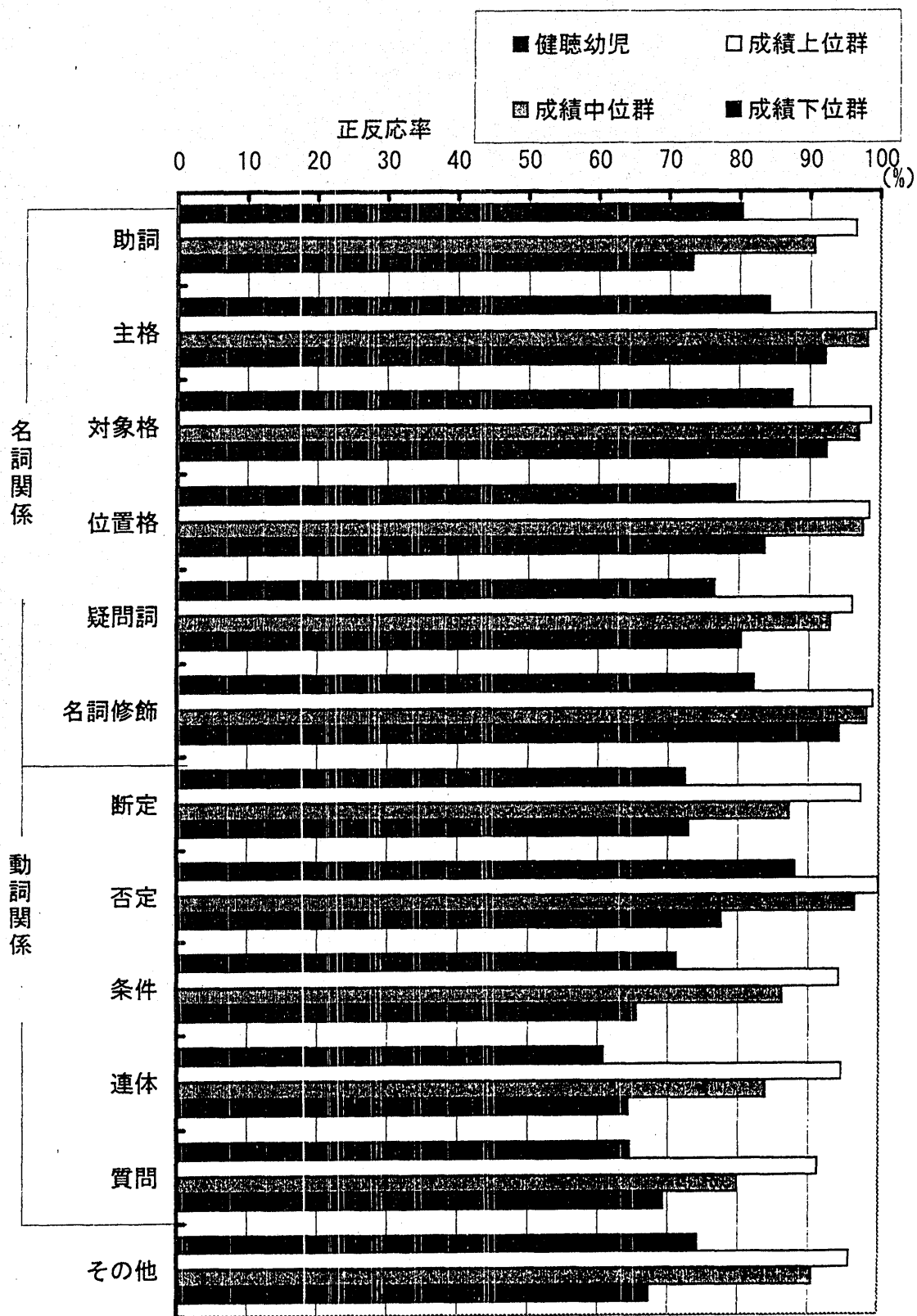


図23. 健聴幼児と難聴学級児童成績群毎の文法的要素別正反応率

## 第3章 総合考察

### 第1節 ガエルテストで見た難聴学級児童の話しことばの能力的特徴

#### 1 話しことばの発達

逢沢(1991<sup>5)</sup>)の行った研究結果から、健聴小学生1～3年生までと聾学校児童1～6年生までの正反応率と本研究の難聴学級児童および健聴幼児の正反応率を合わせて示したのが、図65である(健聴小学生、聾学校児童の内訳は表8を参照)。聾学校児童の良聴耳の平均聴力レベルの範囲は68～129dB、平均は99dB(SD:11.3)であった。平均の比較から見る限り、難聴学級児童は聾学校児童よりも話しことばの能力は高く、小学校2年生段階で聾学校6年生を上回る成績をあげていることが分かる。健聴児と比較した場合、健聴児に比べて話しことばの能力は、小学校入学段階では低い平均を示すが、その後伸びていき2年生の成績では健聴児の入学時のレベルに達していることが、図65から分かる。健聴児と比べて、約1年の遅れが見られる。

また同様に、平均で比較すると、健聴児の場合は幼稚園から、小学校1年生にかけての伸びが著しくなる。一方、難聴学級児童の場合は、1～2年生にかけて伸長が著しい。読書力の発達を調べた新宮・舞菫(1984<sup>23)</sup>)は、4～6年生の時期の伸びが大きいと述べている。この指摘と本研究の結果とを併せて考えると、難聴児の場合に、話しことばの能力は1～2年生の間で著しい伸びを示し、読書力はこの発達した話しことばを基盤にしてさらに発達すると考えられる。これは、坂本(1993<sup>21)</sup>)の「一般に書きことばは、話しことばを基礎にして発達する。話しことばの指導が徹底しなければ、書きことばの誤りが多くなるのは当然である。」という指摘とも一致する。

難聴学級児童の場合、5・6年生では正反応率が落ちる傾向が見られるが、これは、結果の1-(2)で述べたように、自分なりの話しことばで答える傾向の現れのためであり、話しことばの能力はより高次元に達しているとも見られる。この点について新宮・舞菫(1984<sup>23)</sup>)は、「実際の難聴学級の指導過程においては、中学年から高学年にかけての或る時期にコミュニケーション能力が極めて大きく伸びる印象を受ける」と述べている。本研究における対象児の中にもこの段階に達している者がいたため、彼らは機械的に目標文の構造に従って文を表出するのでなく、話しことばとして、より自然な表現を取り、結果的には誤答になったと考えられる。健聴児の資料は、3年生までであるが、続けて4～6年生まで取った場合、難聴学級児童と同じように、話しことばとしてより自然な表現を取るため、正反応率が下がる学年が見られる可能性もあると考えられる。

次に、その発達的特徴を聾学校児童と比べた場合、難聴学級児童の話しことばの能力は一般に聾学校児童よりも、高いことが分かる。ガエルテストの成績の著しい向上は、聾学校児



童の場合は5・6年生の間に見られる。

このように、健聴児・難聴学級児童・聾学校児童の話しことばの発達のピークはそれぞれ時期が異なると考えられる。一般的に、難聴学級児童の場合1～2年生の間がピークになっていると思われる。

以上のことから、難聴学級児童の話しことばの発達は、健聴児と比べた場合遅れがちであるが、年齢と共に伸びていく様子が見られた。難聴学級児童と聾学校児童の正反応率の発達の差は、その伸び率だと考えられる。これは、難聴学級児は普通学級で健聴児と交わるので、話しことばでのコミュニケーションの機会が多く、それが話しことばの能力の伸長に好影響を及ぼすためであると考えられる。

三者の発達を捉えた場合、よく聴覚障害児に対して、「9歳レベルの壁」(萩原, 1967<sup>7)</sup>)が言われ、問題になることがある。その意味は、「『早期教育・幼稚部教育の段階から懸命に指導しても、カリキュラム通りに学習が進歩し得ない子どもが増えはじめ、九歳ぐらいの時期でそれまでの無理が重なり、遅れが堆積する。その結果、子どもの前には大きな壁が立ちただかり、子どもは疲労困憊してついて行けなくなる』という意味に解される。」と坂本(1994<sup>21)</sup>)は言っているが、これは、聴覚障害児の学力等の伸びが9歳を境に停滞する様子を指すと考えられている。しかし、ガエルテストで見た話しことばの能力の発達からは、多くの難聴学級児童においては、「9歳レベルの壁」は越えていると考えられる。

表 8. 聾学校児童・健聴小学生の内訳

聾学校児童

	1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生
男子	8	5	6	10	9	5
女子	8	9	4	10	7	6
合計	16	14	10	20	16	11

健聴小学生

	1年生	2年生	3年生
男子	6	3	2
女子	4	2	3
合計	10	5	5

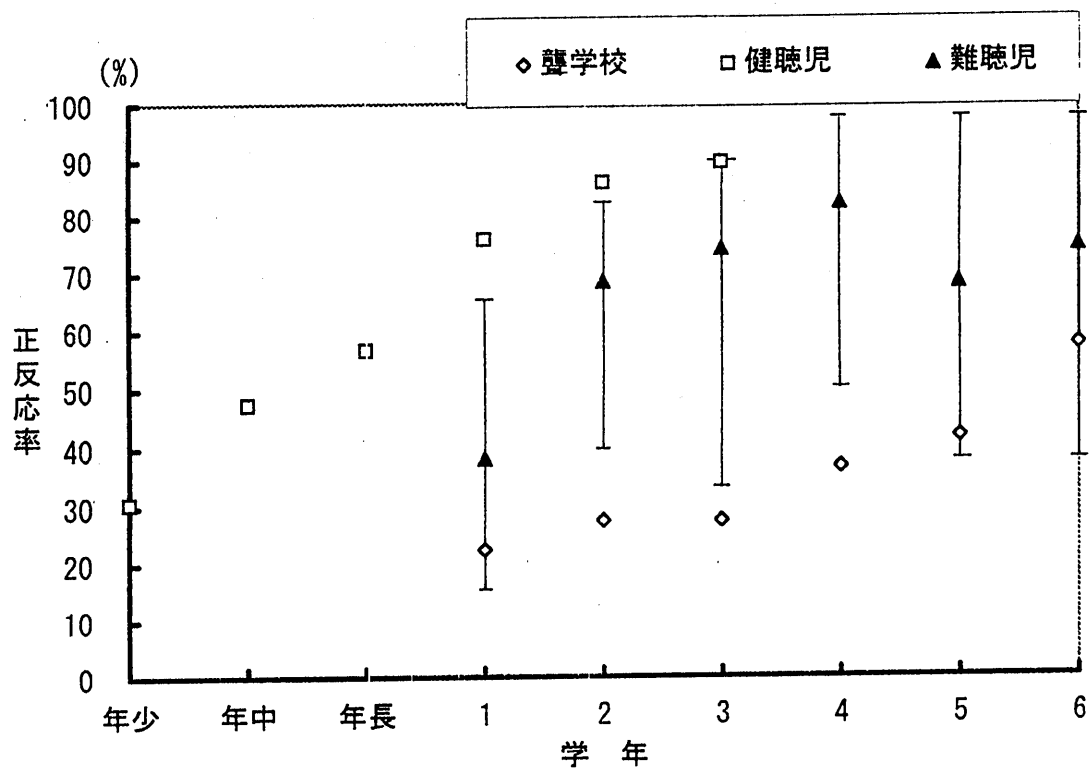


図24. 健聴児・難聴学級児童・聾学校児童学年毎の正反応率

## 2. ガエルテストの文法的観点からの成績

ガエルテストでは、語彙・構文力・文法的・品詞などの観点が調べられる。それぞれについて以下で考察する。

語彙については、ガエルテストの通過率の値から読みとることができる。健聴児・難聴学級児童・聾学校児童の正反応率と通過率の平均値を見たものが図<sup>25</sup>66である。健聴児と難聴学級児童の間には、正反応率においては約10%ほどの開きが見られるが、通過率はほぼ変わらない。ここから、語彙の量の上では健聴児とあまり変わらない能力を難聴学級児童は持っていることが伺える。しかし、正反応率にみられる通り、語彙を文の中で正しく使えないという実態が明らかになった。

構文力については、各活動毎の正反応率から読みとることができる。各活動毎の正反応率を健聴児・難聴学級児童・聾学校児童で比較したのが図<sup>26</sup>67である。難聴学級児童は今まで正答者率で示していたが、逢沢(1991<sup>5)</sup>)の研究結果と比較するために、正反応率を算出し比較した。難聴学級児童は正反応率が健聴児の正反応率の3分の2以上のところ、聾学校児童は、約3分の1から3分の2の間くらいであることが分かる。難聴児と健聴児との間で正反応率の差が20%以上開いたのは、活動6・7・8・10であり、この活動は複文や重文といった複雑な構文を扱っていた。また、聾学校児童は活動1～13へと正反応率が下がっていくが、難聴学級児童は各活動における難易度は健聴児と似ており聾学校児童とは異なっていた。次に、難聴学級児童の成績群別の正反応率と比較してみると(図<sup>27</sup>68)、上位群は健聴児と非常に似た正反応率を示した。また、中位群・下位群においてもその活動毎の傾向は、やはり健聴児に近かった。

品詞に関しては、文法的要素毎の正反応率から読みとることができる。文法的要素毎の正反応率を示したのが図<sup>28</sup>69である。健聴児と難聴児の間に大きな差は見られない。健聴児と聾学校児童は名詞関係は正反応率が高いが、動詞関係は若干正反応率が落ちる傾向にある。これは、児童の文法的要素毎の発達に関して、動詞関係は発達が遅い時期に行われるためではないかと考えられる。

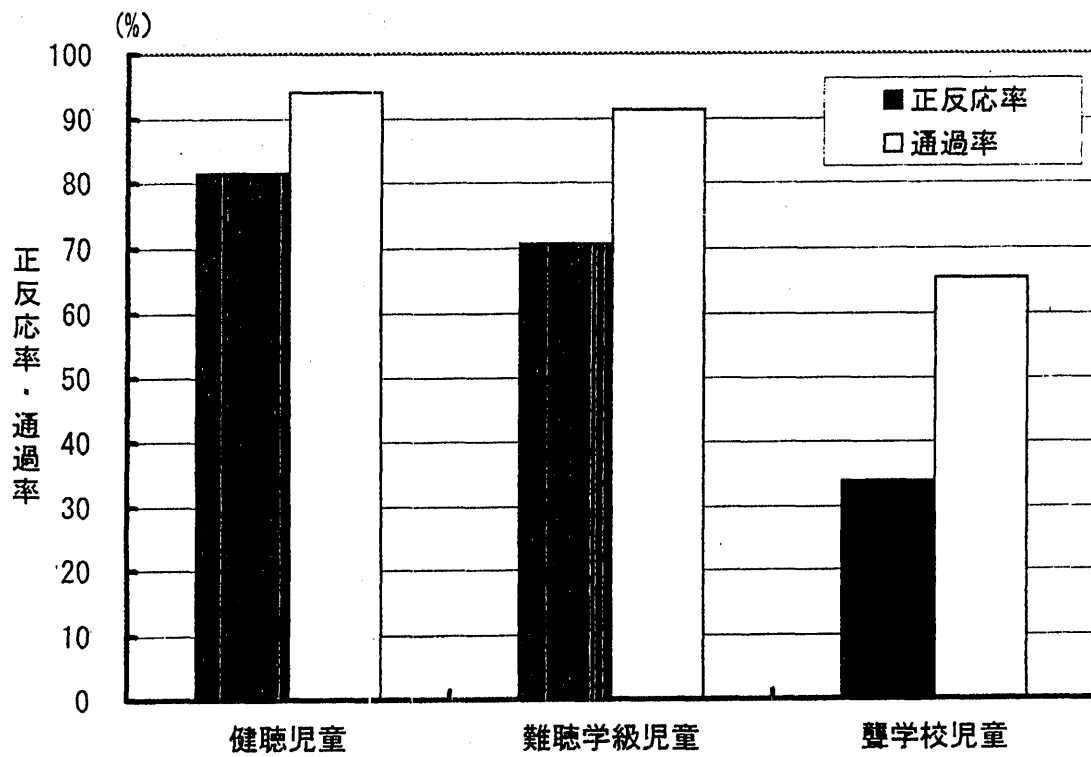


図25. 健聴児・難聴学級児童・聾学校児童の正反応率と通過率

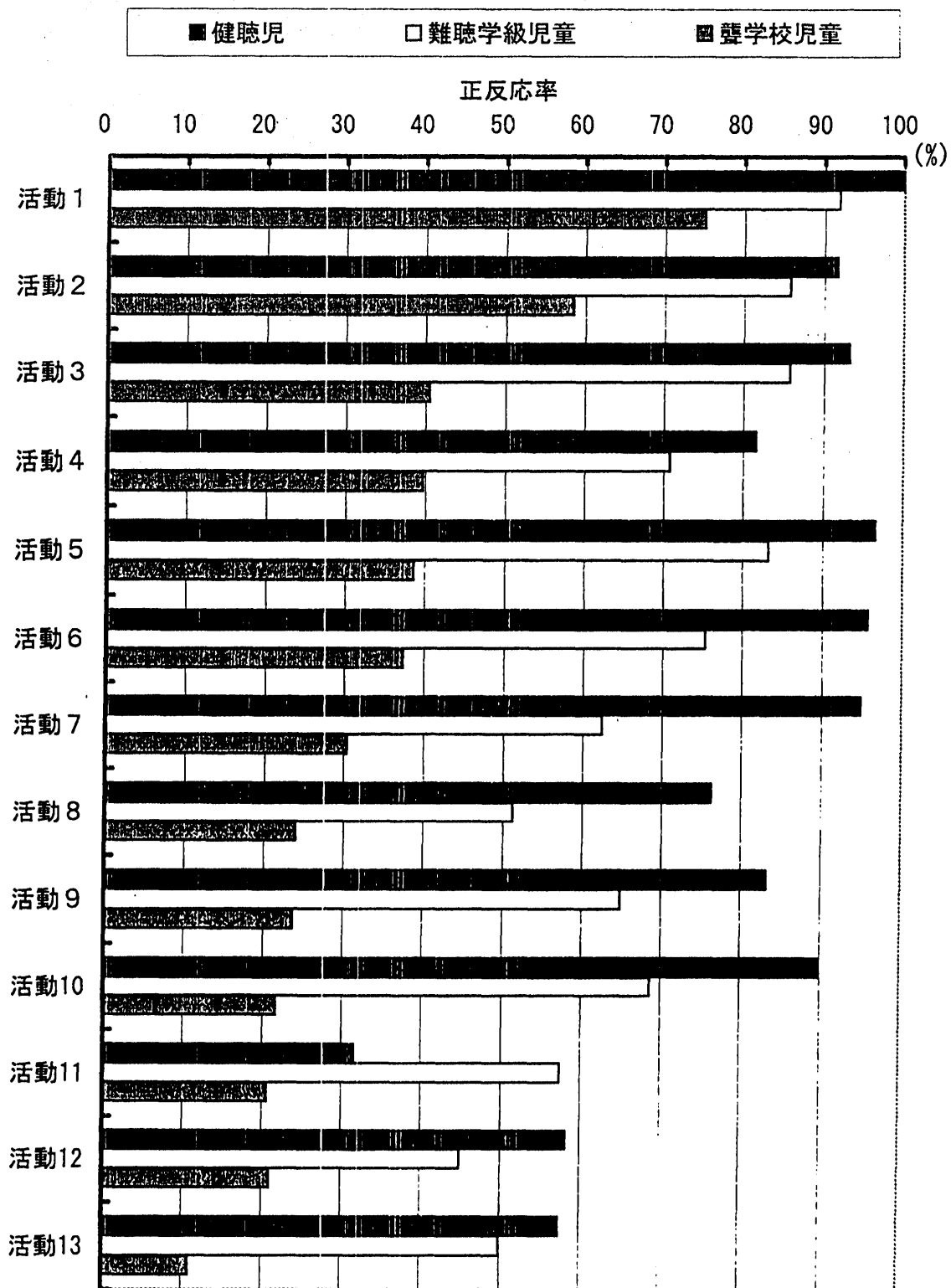


図26. 健聴児・難聴学級児童・聾学校児童の各活動における正反応率

■ 健聴児   □ 成績上位群   ▨ 成績中位群   ■ 成績下位群   □ 聾学校児童

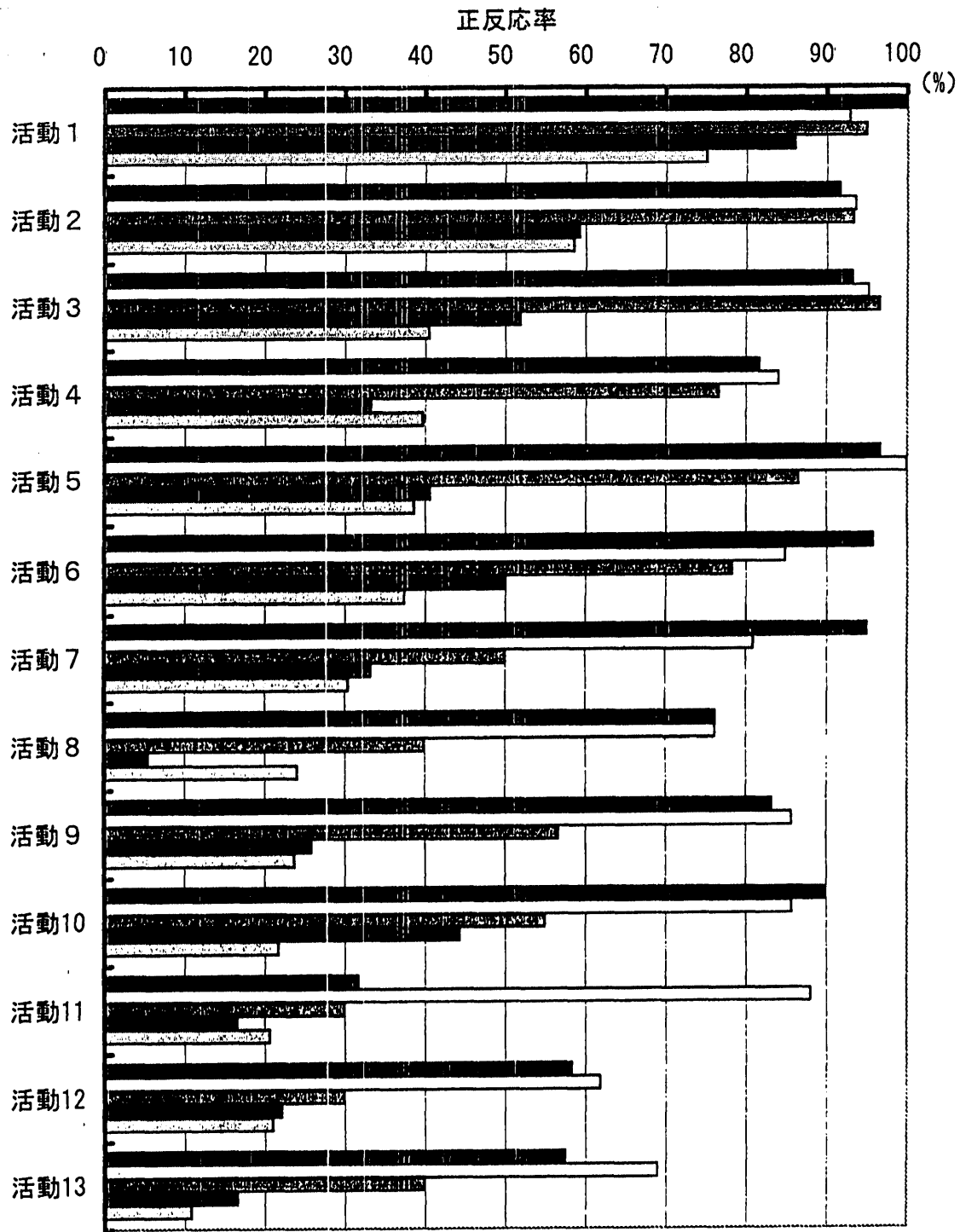


図27. 各活動の健聴児・難聴学級成績群・聾学校児童の正反応率

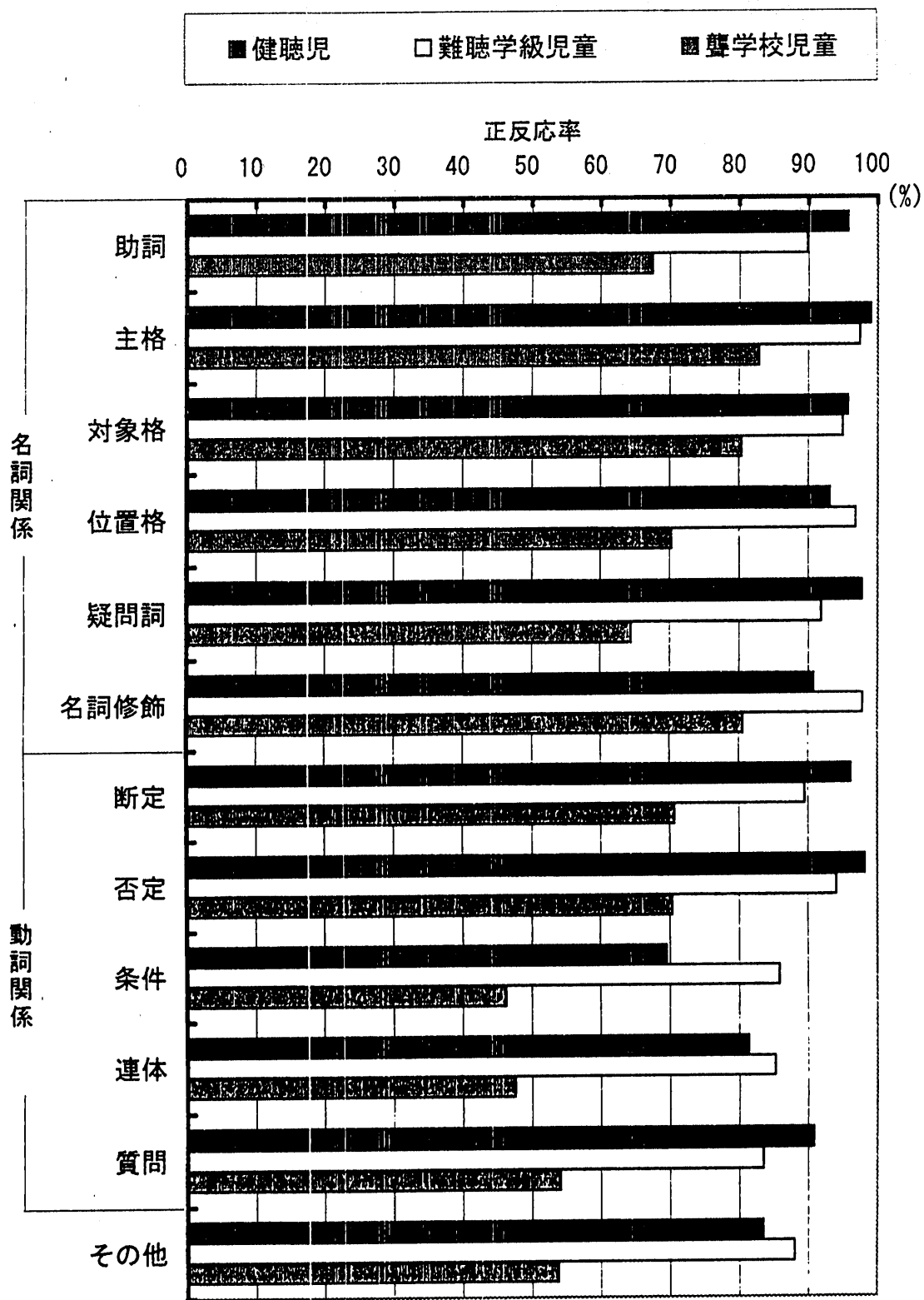


図28. 健聴児・難聴学級児童・聾学校児童の文法的要素別の正反応率



## 第2節 話しことばに影響を与える要因

### 1 聴力および補聴器装用開始年齢

本研究結果からは、良聴耳レベルおよび補聴器装用時の閾値と話しことばとの関連は見いだせなかった。このことに関して、田中(1994<sup>27)</sup>)は、通常学校で学業を進めるに当たり学習に問題を生じているか、あるいは、その恐れのある難聴児の実態について調べた結果、難聴の程度の軽いものはその発見が遅れがちであるため特に、中等度難聴児は、学校教育では、重い難聴児より深刻な問題を抱える傾向があることを指摘した。本研究の対象児においても、軽度の難聴児は教育開始年齢や補聴器装用開始年齢が遅い。そのためきこえと話しことばの関連が現れなかったものと思われる。

### 2 家族とのコミュニケーション手段とガエルテストの成績

家族とのコミュニケーションを主に手話や指文字で行う児童の中にも、成績上位群に属する対象児もいることから、家族とのコミュニケーション手段と話し言葉の能力とは関係が薄いと考えられた。むしろ、友人や教師といった学校での話し言葉を使ったコミュニケーションにおける影響の方が大きいと言える。家族とのコミュニケーション手段が手話や指文字のような児童の場合、通常学級や難聴学級で健聴児と交流し話し言葉を獲得していくことが重要であると言えよう。

### 3 就学前教育とガエルテストの成績

#### (1) 3歳までの教育経験

田中(1994<sup>27)</sup>)は、難聴児を健常児の教育環境にインテグレーションさせるには、「難聴の早期発見」「早期治療教育の開始」の2点が不可欠であるとしている。また、堀内・田中(1986<sup>8)</sup>)は、読書力の経年的観察から訓練開始年齢との相関が高いとし、2歳以前に訓練を開始した群と、2～4歳の間に訓練を開始した群の読書力偏差値を比べ、前者が有意に高いという結果を示した。早期教育の重要性は数々の研究で言われているが、本研究では明らかにすることができなかった。むしろ3歳までの教育を受けていない児童の成績の方がよいという結果が見られた。これは3歳までの教育を受けていないものが多く、難聴学級児童の聴力損失レベルが聾学校児童などと異なり比較的軽いため、3歳以前に発見されたものが少ないためと考える。さらに、森・小西(1978<sup>17)</sup>)は、田中ビネー知能検査から言語的知能を測定し、望ましい就学前教育方法について検討した。その結果、話す力・聴く力・聴いて話す力において聴能訓練を聴力レベルに合わせて一定期間以上行うことが望ましいとした。この結果には賛否両論あるが、就学前教育は受けるだけでなく、その内容も重要であることを示唆するものであり、今回の結果もこの知見を支持するものである。

#### (2) 聾学校やそれ以外のセンター・クリニック等での早期教育とガエルテストの成績

聾学校幼稚部で教育を受けてきた児童とセンター・クリニック等で教育を受けてきた児童

との成績を比較すると、センター・クリニック等で教育を受けた児童の成績の方がよかった。これは、聴力の重い児童ほど聾学校幼稚部で教育を受けてきており、比較的聴力が軽い児童はセンター・クリニック等で教育を受ける者が多いという事情によるものであろう。また、早期教育を受けなかった児童の方が受けた児童よりも成績はよかった。これは、比較的軽度の聴覚障害児は、発見が遅いため早期教育を受けてこなかったものと考えられる。このような軽度の聴覚障害児が早期教育を受けた場合、さらに成績は伸びる可能性があると考えられ、むしろ軽度の児童の早期発見・早期教育の必要性を強く示すものといえる。

#### 5 その他の言語能力とガエルテストの成績

ガエルテストの成績は、語彙・読解力・作文力・知能検査の言語性IQと言った言語能力との関係が強いという結果を得た。話し言葉の能力は単独で伸びていくのではなく、他の言語能力と影響しあいながら発達していくことが示唆された。

会話の受容・会話の発音・聞き取りといった能力は、聴力との関係が強く、話しことばの能力との直接的な関係を支持するものはなかった。しかし、これらの能力は話し言葉の理解や友人とのコミュニケーション上大変重要な能力であると考えられる。これらの能力は、話し言葉の能力には直接関係は見られなかったが、教育的側面やきこえの環境の整備などの面から考えて行くべき重要な問題であると考えられる。

## 引用・参考文献

- 1) 我妻敏博(1988) 聴覚障害児用言語力評価テスト・G A E Lの開発. 聴覚言語障害, 17, 121-128.
- 2) 我妻敏博(1989) 聴覚障害児用言語力評価テストの開発(1). 国立特殊教育総合研究所紀要, 16, 19-26.
- 3) 我妻敏博(1990) 聴覚障害児用言語力評価テストの開発(2). 上越教育大学研究紀要, 9, 137-151.
- 4) 我妻敏博(1994) 聴覚障害児用言語力評価テストの開発: ガエルテスト. 研究成果報告書.
- 5) 逢沢圭二(1991) 聾学校児童における話し言葉による文の表出の文法的分析. 上越教育大学大学院 修士論文
- 6) 出井啓文(1993) 難聴学級の歴史: 東京都の難聴学級を中心に. 聴覚障害, 48, 4-5.
- 7) 萩原浅五郎(1967) 変容現象. ろう教育, 22, 10, 3.
- 8) 堀内美智子・田中美郷(1986) 難聴学級児童の言語力の経年的観察(1): 読書力の経年的変化. 音声言語医学, 27, 3, 223-228.
- 9) 星名信昭(1983) 聴覚障害児の発話資料の分析. 国立特殊教育総合研究所特別研究報告書「手指法等の評価と適応に関する研究」, 67-73.
- 10) 星名信昭・我妻敏博(1983) 聴覚障害児の発話資料の分析: 動詞について. 日本特殊教育学会第21回大会発表論文集, 334-335.
- 11) 井口昭・野口陽子(1979) 難聴学級における総合教育の実践. 聴覚障害, 34, 5, 12-19.
- 12) 井原栄二(1991) ひとつこと: 全国難聴学級の実態調査から. 聴覚障害, 46, 5, 6-7.
- 13) 小林はるよ・田中美郷(1986) 難聴学級児童の言語力の経年的観察(2): 作文能力の経年的変化. 音声言語医学, 27, 3, 229-234.
- 14) 国立特殊教育総合研究所 聴覚・言語障害教育研究部(1993) 平成4年度全国難聴・言語障害学級実態調査報告書: 心身障害児の教育指導の改善に関する調査普及事業.
- 15) 森寿子(1990) 聴覚障害児の音声言語獲得に関する研究: 9歳の壁を打破する教育理論開発の試み. 音声言語医学, 31, 2, 195-208.
- 16) 森寿子(1993) 聴能訓練法からみた就学前言語教育の効果と限界, 残された研究課題: 「9歳の壁」打破へ向けて, 23年間の知見の総括. 音声言語医学, 34, 3, 245-256.
- 17) 森寿子・小西静雄(1978) 難聴児の言語的知能の分析. 音声言語医学, 68-70.
- 18) 中野善達(1990) 聴覚障害児の学力. 聴覚障害, 45, 12, 4-10.
- 19) 能登谷晶子・鈴木重忠・古川亘・梅田良三 難聴児のインテグレーション成績と高度難聴乳幼児における手話の獲得. 音声言語医学, 27, 3, 235-243.
- 20) 坂本多朗(1993) 話しことばの指導を徹底しないかぎり書きことばの誤りは無くせない.

- 聴覚障害, 48, 28-29.
- 21) 坂本多郎(1994) 九歳の壁. 聴覚障害, 49, 42-46.
  - 22) 佐野ふみ子(1985) 附属聾学校からインテグレートした生徒に関する調査. 聴覚障害, 40, 40-45.
  - 23) 新宮絹子・舞茵恭子(1984) 聴覚障害児の言語能力：難聴学級児童の読書力の伸びについて. ろう教育科学, 26, 3, 127-135.
  - 24) 新宮絹子(1995) 難聴児の話しことばの評価. 日本特殊教育学会第33回大会発表論文集, 256-257.
  - 25) 新沢初美(1991) 聾学校児童の文法能力に関する研究：ガエルテストと読書力テストをとおして. 上越教育大学大学院, 修士論文
  - 26) 新沢初美・川浪知佳・我妻敏博・逢沢圭二(1993) ガエルテストによる聾学校児童の話しことばの分析<1>. 聴覚言語障害, 21, 3, 91-97.
  - 27) 田中美郷(1994) 発見の遅れた難聴児の実態：帝京大学耳鼻科小児科難聴言語外来例. 音声言語医学, 35, 2, 213-218.
  - 28) 田中容子(1990) 通級制の諸問題と東京都通級制難聴学級の現状と課題. 聴覚言語障害, 19, 111-126.
  - 29) 田中容子(1991) 難聴学級に在籍する聴覚障害児の諸能力の推移. 聴覚言語障害, 20, 3, 95-107.
  - 30) 山埜信(1987) 普通学級に在籍する聴覚障害児の学級における適応について：ソシオメトリーによる人間関係を中心に. ろう教育科学, 29, 25-32.